
血を紡ぐ者——反逆の声を風に乗せて——

啓至

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血を紡ぐ者——反逆の声を風に乗せて——

【Nコード】

N9020C

【作者名】

啓至

【あらすじ】

時は今から千年後の日本島国で起こる世界は未来に起こる今日に向けて行動を開始した人々は平穏を求め、不安を掻き消そうと手を伸ばし続け高みの人間はコレを嘲笑い、罵り、吐き捨てたそんなある時、製造された『人』はこの世界にとって歪で歪んで揺らぐこの世界を壊す発端だったまだ未来の人々は知らないもう彼らが動き出しているということ 子供達が、自分達の夢に向けて前進し、世界を手に入れるまでを描く予定のお話です（笑）更新は停滞する恐れがありますので、生温かく見守ってください

ドクンッ ドクンッ ドクンッドクンッ――

心臓の音はいつものように高鳴る
この時間^{しゅんかん}だけは罪悪感に囚われず、
俺は躊躇いも無く仕事をこなせる

指定された位置について間もなく、ターゲットの男が動いた

手には黒い封筒が握られていて、彼の周りには大勢の男達がスー
ツに身を包み彼方此方辺りを見回しては無線で連絡を取り合っている
大半は体格のいい欧米人に混じって、髪の毛が橙の一人の少年が
俺の眼に飛び込んできた

――なんだ、来てたのか？

――それとも、裏切ったのか？

そのことに安堵する俺と、信頼し切れていない俺自身が重なる
それでも俺は仕事を全うするだけ
あいつがうらぎったとしても

それだけが俺の存在理由、生きる価値、息をしているという証拠
人としての最低ライン

俺は注意深く腰に掛かっていたショルダーに手をかけてから勢い
良く走り出した

ターゲットの周りについていた男達は俺のほうに向かって拳銃を
向けて怒鳴りつける

けど遅いよ

彼らが怒鳴りつけたその刹那

中心に居た男は倒れて、背中から血を流して死んでいた
黒い封筒はすでに俺の手の中にあった

中にはいつもどりの重みと、生臭いような札束が見えた
吐き気がしそうな『それ』を黙殺して、俺はもう一度だけ持つて
いた拳銃を彼らに向けた

酷く困惑しているような彼らはそれでも俺に向かってきた
泣き声とも叫び声とも似つかない声を上げながら――

逝かせてやるよ

お前らのいける所まで

孵^{もど}らせてやるよ

もう俺には戻れる場所なんてないから――

俺は駆け出して、彼らの懐^{なか}に飛び込んだ

（後書き）

楽しい話になればなあと思ってますんで宜しくおねがいます

前奏　ハテヲ魂る朝焼けの唄

まだ夜も明けない暗い部屋のなかでぼやけた様な照明の明かりだけが、薄っすらと室内を照らしていた

「今回もご苦労だったな、星爾」

「有難う御座います」

いつもど通りの会話、この部屋の窓にあの人が手に持っているグラスの中の紅いワイン

温かく設えられた家具とは裏腹な醒めたような部屋

一面窓辺になっている所に椅子を置いて坐っているあの人

そう全部いつも通り。何も変っちゃいない

「今回のターゲットの腕はどうだった？まあ全てお前が仕留めたと矢木那から聞いているが」

試すような質問

それでも俺は軽く口を開いた

「……『俺等』が行くほどでもなかったように思いますが」
少しだけ皮肉ってみる

大体、アイツが現場に居たこと自体気に入らなかった

「はははそうか、心配して矢木那を行かせるまでもなかったな」

そう言っであの人——俺達のボス『三條^{さんじょう} 聰太朗^{そうたろう}』は満面の笑みで言う

「今回のターゲットは前回の奴と少し関係があつてな……」

俺は椅子に掛かっていたコートを持って、シオルダーに手をかけながらゆっくりと三條に向かって背を向けた

「……星爾？もう行くのか？」

「はい、先約がありますもので」

俺の言葉に、三條は少し困ったように続けた

「そうか・・・なら仕方が無いが、次回についての仕事の話は矢木那に話しておくか・・・？」

またアイツに？

冗談ならもつとふざけてくれよ

俺はドアに手をかけてから開け放った

「どんな任務でもコナシテ見せますよ、明日も任務なんで。じゃ、失礼します」

ドアを閉める音は多分聞き取れないくらいに小さい

「どんな任務でも・・・か」

ドアの向こうで、三条は嬉しそうにそのフレーズを繰り返していた

夜は明けた――

俺の朝はハジマリを迎える

箱の中

ドアを開けて、廊下の角を曲がりきった俺の眼に、一人の華奢な少年が飛び込んできた

今日現場にいた あの翠色の瞳の少年

眼が合うや否や、少年の口から綺麗な声が漏れた

「あ、星爾終わった？」

まだこんなところにいたのか……

苦笑いで出迎えてくれたその少年——矢木那 譽莉の頭を、

俺——三木 星爾は軽くポンポンと叩いた

「ああ、終わった。もう今日此处に要は無い」

用件だけ言つてなるべく早くコイツをここから遠ざけたかった俺の口は自分の内心よりも素直で、ヤケに口の回転が速くなる心音を抑えようとしてくるくせ、そのくせ歩幅が大きくなるもう息を吸うのですらじれったい

「セイジ？」

それに気が付いたのか、俺に付いて来るだけでも必死に息を切らすヨリの声が耳に届いた

「何」

俺がそういつて、よく分からない電磁式の箱を動かすためのボタンに手をかけた

酷く些細な乾いた音がして、ボタンが点滅する

「いや、特に何がつて訳じゃないんだけどさ、やっぱり『赤蝶』は忙しいんだなあって」

赤蝶は俺の二つ名で、普段はこっちで呼ばれることのほうが多いまあヨリがそう呼ぶのも珍しくはない気がしたけれど、何かおかしい気がした

「遠まわしにするなよ、他に言いたい事があるんだろ」

「う……ん、えと、あのね——」

ポーンという鈍い音がして、俺達の目の前のドアがゆっくり開いた
乗り込むと、アッサリとドアが閉じて、汚い音声のアナウンスが
聞こえた

『ご利用、ありがとうございます。どちらまでお乗りになりますか
?』

口を開きかけたヨリを遮るように、俺は早口で言った

「俺は死に底無いの居る玄関ホールまで。隣のコイツは中央改札の
エントランスまで。料金は俺のno.0から卸してくれ」

隣から、「僕のからでよかったのに」なんていう声がしたけれど、
俺はそれを黙殺した

足元の点滅と共に響くアナウンスは

『かしこまりました』

とそれだけ言うのと、止まって、箱は動き出した

「で、なんだよ」

俺はそれを見計らって、さっきから黙っていた（黙らせていた）
ヨリに声をかけた

ヨリは突然で吃驚したのか、それとも緊張していた糸が切れたの
か、何でか安堵のため息が出ていた

「あ、うん。それで、僕今から朝までお休み貰っちゃったの！」
朝まで……

明日の任務は最低でも八時ジャストから

今の時間は零時二十五分、多くても七時間がギリギリだ
多い、と思っただろうが良さそうだな

「やけに長いな、」

「だから嬉しくってさ。三条さんにお礼言わなくっちゃ」
「……………」

あんまりヨリが嬉しそうな顔をしたから、俺は話す気が失せてし
まった

そんなこと気にも留めないように、ヨリは満面の笑みだ

「あ、それでセイジに言われてたリストの件なんだけど、お休み貰

えたから出来そうだよ。ちょっと時間掛かつちゃうかもしれないけど、明日の朝までには——ッテ——！」

考えて口が動く前に手が出ていた

俺の拳はヨリの後頭部を直撃して、当の本人はうずくまっている
「いったいよセイジ！馬鹿になつたらどうするのさ！」

「もうこれ以上馬鹿になんないから安心しろ馬鹿」

「ってセイジ！」

顔を真っ赤にして起こるヨリは別になんとも怖くなかった

まあ考えてる事が馬鹿すぎて手が出してしまった俺も俺だったけれど
「折角の休みなんだから寝てるよ馬鹿。そんなの今度でいい」

俺達は多分ここ三日間ろくに寝ても無い

俺はそんなのしょっちゅうすぎてもう慣れてしまったけれど

そんな俺と違って、こんなに華奢な奴が耐えられる気がしなかった

「今度つて言つても、僕できないってば！」

「じゃあやらなくていい。東堂か楓にでも頼む——ほらヨリ、もう着いたぞ」

俺の声と共に、目の前のドアが音もなく開いた

同時に、さっきの汚いアナウンスが流れる

『中央改札エントランスになります、ご利用ありがとうございます』
「た」

「じゃあな、ヨリ今日の任務で」

「えっちよっと！セイジ！」

俺はなかなか降りないヨリの背を軽く押して、ドアの向こうまで突き出した

慌てふためく彼はそれでも体勢を立て直してこっちに向かって手を振る

俺も軽く手を振ってアナウンスにドアを閉じるように指示した

ドアは何秒も経たない間にゆっくり閉まって、ヨリの顔も見えなくなつた

俺はゆっくりため息をついて、壁に寄り掛かった

部屋の中

さて、行きますか

星爾を見送った僕――矢木那 響莉は、そのまま非常用の階段を使って上へと上りはじめた

今の時間は丁度午前一時過ぎ――

今から部屋へついたら仮定してもゆうに六時間休暇な訳だからゆっくり寝れる

そんな時間があるのは一体何ヶ月ぶりなんだろう

僕は嬉しくなる反面、今も仕事をしている星爾に申し訳なくなった僕の任務回数は星爾にくらべたら塵にも満たないくらいにほんの僅かしかない

画面の前での仕事が多い僕は、普段なら部屋から出ることなんて殆ど無い

だからこうやって時間を見つけては訛ってる身体を動かしてる訳なんだけど

僕の足が重くなってきたその時、いつも通りのドアが僕を迎えた徐にポケットからカードを取り出す

ドアノブの横にある隙間にそれを通して、僕はドアを開けた

「変ってる訳ない……か」

僕が呟いた声ですら味気ない

僕は手に持っていたノートパソコンをデスクに置いてから自分の部屋のドアを開けた

いつもながら汚い

部屋には足の踏み場もないくらいのコードに配線の数

それは全部一つのパソコンからまるで流れるように溢れ出ていて、一つの絨毯のように床に張り巡らされていた

そこを縫うように歩きながら、僕はベットにダイブして、足元にある布団を手繰り寄せた

温かい温もりは僕の身体をゆつくりと包み込む

それは僕の心を掴んで離さない魔性の蜜の花
瞬く間に視界はぼやけ始めて、聞こえが遠退く

その時、パソコンの画面が勝手にチカチカと画面が
点滅した明かりが

僕の顔を劈くように明るく照らした

——— 休暇のはずなのに？

僕の心は一瞬でブルーになって、さっきまでの眠気が覚めてしま
った

まあ仕方ないか

僕は反抗する身体を丸め込んで、起き上がると、パソコンの目の
前に置いてある椅子に腰掛けた

それでも待ちきれないとも言つように、画面は点滅を続ける

「はいはい、少々御待ちください———」
まだ点滅いつか？

僕のパソコン画面は仕事の依頼が着た時に勝手に起動状態になっ
て画面が点滅する仕組みになっている

いつもフルで起動になっているパソコンは熱を持っていて熱い

僕はキーボードを連打してから依頼画面に移る

そこには三条聡太郎からの任務通告が届いていた

「三条さん？」

——今さっき星爾と逢ったばかりなのに

僕はクリックしてメール内容を確認した

内容は以下のようなものだった

「 本月任務最新通告 優秀ナンバーズ諸君の矢木那、三木くん今回は前回に引き続いてペアでの参加になる 詳しいことについては明日話す 時刻は明後日正午の私の部屋だ 時間に遅れることの無いように では 三条 聡太郎 」

「やった……！」

僕は小さくガッツポーズをとって、さっきまでの温もりに戻った

——認められてる？

——それとも使い捨てにされる？

そんなのどっちだっていい

僕は高鳴る主張を抑えきれずに嬉しさの余韻に浸りながら眠りについた

でも僕はこの時まだ分かってなかったんだ

どうして三条が僕らをペアで呼び出したのかも

仕事の依頼についてワザワザあの部屋まで来るように仕向けたのかも

僕の休暇はそんな事とは関係なく、倅せに過ぎた

朝はゆっくりとあけていった

檻の中

「朝井——植田——猪川——上木——」

暑くだるい教室の中に担任の声が響く

その後が続いて、生徒の返事が木霊するように遅れて返ってくる

「三木——矢木那——」
「はいっ」

無駄に元気な返事を返しながら頬杖をついている響莉を見ながら先生はまるで決まった事でも言うかのように続けた

「……なんだ、三木はまた遅刻なのか？おい矢木那、お前——」

「僕なにも知りませんよ？」
言い終わる前に先を言われて、先生はそのまま口を噤んだ

ドアの向こう側からそんなやり取りが聞こえる

俺は軽いため息をついてから鞆を持ち直すと、ゆっくりとドアを開けた

「遅刻だぞ！三木！！」

耳を劈くような大声に俺は耳を塞ぎながら席に着いた

「今日で今学期始まってから30回目だぞ？そろそろ自覚を持った行動が出来ないのか？」

席に着こうとする俺を責め立てる先生の顔は苛立ちを隠せなくて赤く紅潮している

それを鬱陶しそうに見た俺は面倒くなくて目を伏せてから頭を軽

く下げた

「すいまんでした先生、以後気を付けます」

「その台詞何回目だと思ってるんだっ？大体お前は悪いと思って――」

俺の胸ぐらを掴み掛かったその時、チャイムの音がやけに大袈裟に響いて鳴った

「――チャイム……鳴りましたけど？」

愛想の無い無関心な赤い瞳が一瞬、紅色の光を佩びて輝くニヤリ、と口元が薄く笑った

「SHR終了！全員このまま一限目だ！――三木！この話は後日じっくりするからなっ！」

そう言い放ってから先生はドアを開けて教室から立ち去っていった

響莉は先生が行くのを見計らってから、席を立て俺に近づいてきた

「はあゝ……おはよう星爾」

休暇を取ったといっていたわりには眠そうな声の華奢な体付きの

響莉は俺の前の席に腰を落とした

「今日はよく眠れたか？」

「お陰様だね」

響莉は笑いながら手をヒラヒラさせて頬杖をつく

「そっいえば星爾、三条さんから次の任務の話聞してる？」

「三条からの依頼？」

俺に言わないで響莉に言ったのか？

煮え切らない想いを断ち切って、俺は続けた

「聞いてないな。で、それがどうしたんだ？」

「今回は僕とペアなんだってよかったね」
さも嬉しそうに言う

俺は殺意にも似た視線を脳裏に焼きついている三条に突き立てた

「じゃ、収集掛かってんの今日か？」

「うん、まあ」

「そんじゃ放課後な」

「了解」

響莉が返事をしたその時、

一限目を告げるチャイムと、重そうな教科書を持った頭の軽そうな若い実習生がドアを開けて入ってきた

「始めるぞー席に着けー」

席を立て話をしていた生徒達はゾロゾロと自分の席に戻っていく

「教科書45ページ開いて――」

俺の耳にはそれ以上の言葉は入ってこなかった
一瞬で聞こえが遠のく

俺の眼には空が青く霞んだ

赤と紅

「俺達が一番乗りみたいだね、星爾」

そう言う声は、何故だか嬉しそうに緩んでいて軽くステップを踏むように弾んでいた

「お前、何言ってるか分かってるのか？」

「へ？三条さんの時間にはまだ余裕あるから大丈夫だよ？」

「そういう問題じゃない」

「なに怒ってるの？星爾？」

「もういい」

「？」

俺達が此処へ来た理由は三条の命令通り

『俺達』—— 聰太郎直属の収集

いつものように任務が終わって^{がっこう}から、最新の注意を払ってあの箱に乗り込んで来たはいいものの、昨日ここに居たとはいえ安心はできない

廊下には誰の気配があるわけではなく、唯の静寂と自分自身の心音が支配しているだけでヨリの声ですら俺の耳にしっかり届く訳じやなかった

気を抜くな

そんなため息をつきたいような衝動を俺の中のもう一人の俺が握りつぶす

その時、聞き慣れた猫のような甘ったるい身体に悪いような声と規律正しいような堅苦しい声が聞こえた

「やつほあゝせえいじくうん」

「お久しぶりです、譽莉さん」

「あ！亮奈ちゃんに楓くん！久しぶり！」

俺達が振り向くと、派手な洋服に身を包み、鼠色の髪を二つに結った少女——鬼無^{きなし} 亮奈^{りょうな}と

濃い紺色の髪の清楚な格好をした少年が見えた

「なんだ、お前らか——用でもあるのか？」

窘めるように言った俺の言葉に当たり前だとしても言うように紺色の髪色——瞳の色は薄い水色の少年——榆水^{ゆみな} 楓^{かえで}が喰いついた

「なんだ……ってその言い方は無いんじゃないですか？！俺のことは何百歩譲ったっていいです！でも、亮奈様のことを悪く言うのは——！！」

「ちよおつとおゝかえでくん？だめよおそんな怖い顔しちゃあ」

「え？あ、はいすいません亮奈様」

「いいよお全然」

亮奈は軽くたしなめると、楓の頭をポンポンと撫でてから俺達の横切って行った

耳元に軽い戸息が掛かる

「次回は絶え対つに負かすからねえ星爾くん——覚悟しとけよ」

甘ったるいその声は

どす黒いその声は

俺に耳打ちしてから消えた

後ろには気配すら残っていなかった

「亮奈さん変らなかつたねえ、楓くんもあんなに熱くなっちゃってさ」

「——聴こえたか？」

「……何が？」

聴こえてなかったのか

俺の中で何かが安堵したような

抜け落ちたような安心感が広まった

「あいつ等には気を付けるよ、適当にでいいけどな」

亮奈は表裏が激しい上、感情の上下がうねるように難しく、コン
トロール出来ない

俺に敵意を見せるのは今回が初めてな訳じゃない

楓は亮奈に好意を持っているのはあからさま、彼女に従順すぎて
周りが見えなくなるほどに

頭が痛い

俺が頭を抱えた瞬間、また後方で声がした

今度は否応に抜け落ちた

真の魔女の声

「ハロー 赤蝶ご機嫌いかが？」

「ハロー 赤蝶ご機嫌いかが？」

—— 苛々するんだこの声は

俺は少し離れていた響莉の腕を掴んで俺の後ろに引き寄せた

「消えろ、虫唾が走る」

「まあつれないわねえ、ねえ羅々お姉さま？」

「そうですねえ、縷々なんてつれないことでしょう」

髪の色は桃色、瞳の色は太陽に焼け焦げたような煌く紫

まるでシンメトリーのように鏡に映ったようなその姿の二人

この双子の魔女達—— 姉、須永巳 すながみ 羅々（らら）

妹、縷々（るる）

俺は放つ声に一層力を込めた

「……消えろと言ったはずだ」

「星爾、そんな言い方は——うつあつ」

途端、響莉はガックリと膝を折って倒れこんだ

「響莉っ？」

「まあまあ大丈夫ですことお？先に行ってお待ちしておりますわ」

「まあまあ大丈夫ですことお？先に行ってお待ちしておりますわ」

「とつと消えうせろ！」

俺がそう言った瞬間、魔女達は三条の部屋へと足を進めていった

「星爾……僕は大丈夫、平気……だよ。このくらいなら……」

「やっぱり『接触』するのは危険すぎる今回は——」

「やるって決めた。僕自身が今、自分の足で立って歩く事を決めたんだ。これは星爾にだって壊させないよ」

「……お前が意外と強情だったのを忘れてたよ」

「ありがとう」

響莉がその細い足で立ち上がったとき、俺達の目の前に二つの陰が見えた

「——侍気取りが何か用か？」

俺の声に反応したのか、陰の主はゆっくりと試すように答えた

「魔女の麻酔にでもかかったか？」

「赤蝶もお守りとかするんだあねえ」

「さあな、東堂のお守りよりは断然マシだ、お前より随分と軽くて身軽だしな」

「なっ……お前よくも！！」

声を発したほうが剣を鞘から抜き取るうとした瞬間、堅い声が重苦しく響いて空気に刺さった

「やめる小粋、見苦しいだろ」

場の空気が凍る

言われた少年、髪の色は金髪、瞳の色がグレーの――伊砥
部 小粋はまるで小さい子犬のようにキャンキャンと鳴いた

「でもっ棟夜！」

「いいから下がれ、赤蝶と殺り合ったって答えくらい見える」

そういった声の主、髪の色は赤が滲んだ茶色、瞳の色は澄んだ翠
色――東堂 棟夜は腰に掛けた鞘にある刀に手をかけながら

緩やかな笑みを此方に向けた

「はっ、お守りのほうが『勝てること』と『逃げること』を履き違えてないらしいな」

俺は響莉を後ろに立たせてからそれだけ言って、間合いを取った
東堂――この男はどこか信用が置けない

「まあな、赤蝶ほどではないが……すまないな矢木那くん、具合は大丈夫か？」

「え？あ、はい！大丈夫です……ありがとうございます」

響莉が言った瞬間、小粋が勢い良く噛みついた

「棟夜と口をきくな！！」

「え？ああごめん、小粋くん」

「もういい、行くぞ東堂！」

「ああ、じゃあな赤蝶」

「……………」

そついい終えた東堂と小粋は俺達の前から姿を消した

「ようやく行っただか……」

「返事くらいしてあげなよ、星爾。東堂さん僕のこと気遣ってくれたのに――」

「ここにいる人間で信用できる奴なんて居ない」

「まあたまたまなこと言っただけ……」

その時、不意に梔子の花が香った

この殺気

よく知っている、この匂いの主は――

俺は横にあるショルダーに手をかけた

「星爾？どうしたの？」

「――お前……か？」

息を呑む

――来る

赤褐色の髪に藍色の眼、髪は一部分だけ白く、肌の色はまるで陶器のように白い

彼の名前は――

「都尾月 希叉……」

「大正解、よくわかったな」

俺はナイフを希叉の首筋に僅か数ミリまで近づけた

「まあな、こんな悪趣味なもの付けてるのはお前くらいなもんだ」

「そうか？お前と同じだと思っていたんだが」

試すように言うその様は、三条を彷彿させる

此処で殺り合ってもしょうがないか……

俺はナイフを引いた

「希叉さん、そんなこと言っては赤蝶さんが可哀想ではありませんか？」

「そうかい？優美」

「はい、そうですよ。お時間も迫っていますし、急ぎましょう――

――」

促す少年は髪色は薄い緑色、瞳の色は濃い群青――西園寺

優美――少し焦っているのが見て取れる

忠誠心は主の危機が迫っても揺らがない……か？

微笑の裏側に居る俺は酷く冷めているようだ

「——虫には構ってられませんか・・・ね」

「わかったよ、もう行こう」

「では、赤蝶さん」

「じゃあね、星爾——『発表』が楽しみだ」

「そうかよ、力も無いくせに」

俺が言った時には既に希又は居なかった

「・・・星爾？大丈夫？」

「ああ、もう行くか、時間だ」

「うん」

「俺がついてる、三条に下手な真似はさせない」

「わかってるよ」

俺はドアに手を掛けると、勢い良く開け放った

赤と紅（後書き）

人物が多くなってきたやもですが、次回あたりで整理してお伝えできればなあと思っております（笑）

なんでこの子達が出てきたかは後三話くらいでわかるかと思われるますので・・・

十人と舌拾人と独り

開け放ったドアの向こうには唯の暗闇と、一面窓になった場所にある独りの影しか見えない

暗闇に満ちた部屋は唯一人の気配しかしない

本来は十一人居るはずのこの部屋に

気配は一人

しかし、微かな話し声は十人

「良く来たな星爾、今日は来ないかと思っていたぞ？」

気配の主は三条 聡太郎唯一人だけ

暗くて見えないだけであいつ等はこの部屋に居るのか……

俺は響莉の手を握って後ろに就かせた

「いいえ、三条さんのご命令とあらすれば何処へでも」

「たのもしいな、流石は『赤蝶』だ——では、始めるか」

三条はそういい終わると同時に左手を高々と上げて、指を鳴らした

——俺と知ってて来る……か

足音が近づいてきて消えたと思ったら、それと同時に声がした

「赤蝶覚悟っ！！！！！！」

正面から日本刀で

始めは小粋？正気か東堂——下手したらコイツ

——死ぬぞ？

「甘いな」

邪な笑みをみせた小粋の腹部に思い切り回し込んだ脚を食い込ませる

「ぐはっ」

次の瞬間、小粋は腹部を押さえて倒れこんでいた

刀は虚しく俺の足元に落ちた

「小粋っ大丈夫かっ？」

咄嗟に東堂が小粋に駆け寄る

主人の犬が仇になっ たな、東堂

俺はそのまま東堂の首筋にシオルダーにあつた拳銃を押し当てた
東堂の力ない声が聞こえる

「やるな赤蝶、背後に響莉が居るのに……でもな、それがお
前の——」

背後に二人の気配——

「最期だよお！赤蝶！」

「最期だよお！赤蝶！」

——魔女か？

俺は目の前に居た東堂を蹴り飛ばして向背に回った

読み通り、魔女は手に不可思議な医療器具を持って飛び掛ってくる

「救えないな、弱みを突くってやり方は——」

俺はシオルダーに手を入れて、手探りで探し当てた麻酔針を魔女
達の左肩に打ち付けた

二人は一気にその場に倒れこむ

俺は咄嗟に持っていた銃を響莉に差し出した

「響莉、この銃を前に構えてしゃがみ込め」

「はいっ！」

俺の目の前から希叉、響莉が構える目の前には優美が全力で走っ
てくる

が、優美は響莉が構える拳銃の前に一瞬怯んだ

これはチャンスか？

「ほら優美、忘れ物だ」

俺は希叉の足に小粋の刀を突き立てて、背後に居る優美に希叉を

投げ渡した

「えっ？希叉さんっ？！うわぁっ！！」

二人はそのまま倒れこんだ

残る二人は――

「せえいじくうん、後ろが空きなんですけどぉっ？」

「響莉さんっ行かせてもらいますよ！」

読みが良いな、流石楓だ

亮奈を俺に付けたか……

――でもな、やっぱりお前は詰めが甘いんだよ

俺は響莉から拳銃を受け取ると、楓の頭部に麻酔針放った後、両足に麻酔銃を撃ちつけた

「なっ……ぐっ」

楓は麻酔針を避ける事に集中しすぎて銃弾を避けきれず、膝を折って倒れこむ

その背後には既に援護に回ろうと亮奈が回りこんでいる

が、楓の頭部にむけて放った麻酔針が楓が倒れた事により目標――

――ターゲットを失い、拳銃を構えた亮奈の手に刺さった

「うっ」

「響莉、背中だ」

「分かった」

駆け出す響莉と同じ速度で亮奈のてから拳銃がこぼれ落ちる

俺は駆け出してこぼれ落ちた銃口を亮奈の額に向けた

それと同時に響莉が亮奈の背に拳銃を突きつけた

――これで

「チェックメイト」

俺の眼には満面の笑みに落ちる三条の姿と、悔しさに滲む亮奈の顔が歪んだ

褒め言葉と一人独り

「上出来だ星爾、譽莉、流石だな」

「有難う御座います」

「ありがとうございます、三条さん！」

譽莉は無傷……

— 先ず安泰だな

俺の目の前の三条は満面の笑みで笑っている

「——— ところで皆、大丈夫か？ 傷は……」

最後まで言い終わらないうちに、皆は口々に話し出した

「ある訳ないじゃないですか、三条様」

膝を払いながら楓が答える

「こんな的大丈夫よお三条さぁん」

亮奈はいつにも増して不機嫌そうだ

「私達は大丈夫ですわ」

魔女達は肩に刺さっていた麻酔針を抜き取って歪に笑う

「俺達も平気です、心配は及びません。な、棟夜」

「ああ、小粋」

腐れ刀を鞘に収めながら小粋と東堂は立ち上がった

「うはぁー小粋の刀切れ過ぎだよ、僕の服汚れすぎ」

「帰ったらお洗濯しますから、我慢してくださいよ希又さん」

「わかってるよ、優美」

希又は恨めしそうに俺を睨みながら立ち上がって服を払った

「皆無事ならそれでいいんだけどな」

三条はそう言ってからゆっくりと立ち上がった

全員、何かに導かれるように三条の前に一列に並ぶ

「星爾、今回のみんなの動きはどうだった？」

「ああはい」

「ご指名ですか」

毒づく俺を響莉の眼が捕らえた

「今回小粋を一番最初に来させたのはあまり良い案とは言えませんが、東堂と共倒れでしたし……まあインパクトは大きかったと思いますけどね」

笑止

俺の目には今にも噛み付きそうな子犬が歯をチラつかせている
それを分かっている、俺は遭えて言う

我ながら見た目以上に気分が悪い

今すぐ自分自身の口を塞いでしまいたいほどに――

「まあコレが縷々達と手を組んだ作戦だと言うのなら良い案と言えると思いますが……俺の背後を突く隙を作ったと解釈すれば良い訳ですし、俺を小粋、東堂でかく乱させてイレギュラーを創る」

「そうすれば必ずチャンスが生まれる……か？」

「はい、その通りです三条さん」

三条は満足そうにワインをグラスに注ぐ

魔女は肩の汚れを気にしながら拳を握り締めている

「そのあとの希叉と優美ですけど……優美の隙が無ければ俺自身怪しかったですね、希叉を一人で止められる自身はありませんでしたし、小粋の刀がなかったら後ろに投げ飛ばす事も出来ませんでした」

「全く、腰が低いな星爾」

「いいえ、三条さんほどではございません」

俺は満面の笑みで答える

脳裏には今にも擦り切れそうな血管が浮き出ている自分が居るのを黙殺して続けた

「最後の亮奈と楓が一番良かったんじゃないですか、亮奈も楓が倒れた時、予期して援護に回ってましたし」

「そうか……見解は以上か？」

「はい、以上です」

「わかった、下がっていいぞ」

「はい、三条さん」

決まった台詞、決まった言葉、態度、挨拶、一礼、返事
つまらない

その時、三条の声色が薄っすらと変わった

「では、皆に一つだけ追加任務だ————紹介しよう、この方達
は……」

俺の眼に信じられない光景が眼に映った

嘘だ……この部屋には十一人のはず

なんで……なんで此処に五人もオーバーメンツがいるんだ

「さあ自己紹介を右から順に……」

俺の頭は次の瞬間から真っ白に染まった

褒め言葉と一人独り（後書き）

遅くなってしまっていてまじめに申し訳ないです。。。
すいません

テストが終わったらまた更新しますのでそれまで、
少々？といいますが長らくお待ち下さい

時計の針 秒針 動く事の許されない俺達

あの日から十日たった今日の日付けは日曜日

学生ならずとも休みをもらうはずなこの国で今日でさえ俺達は仕事三昧だった

もちろん休憩時間なんてそんなものあるはずも無かったけれど

そんなとき、後ろから錆びれた声が二つ弱々しく耳に届いた

「ねえっセイジ、まだ歩くのっ？」

「………っ」

俺が後ろを見やると、ヨリと「彼女」はもうへばっていて息も乱れている

着いてくるのが精一杯なのか、それともそれが「フリ」なのかなんて考えたくも無いけれどおそらく「彼女」の場合は後者であろう

俺はヨリに持たせていた鞆を受け取って、黙って前をひたすら歩く後ろで彼女を気遣うヨリの声が聞こえる気がするけれどそれは気のせいだと勝手に自分を黙殺して足を進めた

そんな俺の事をみかねたのか、ヨリが声を荒げた

「セイジ、ここで一旦休もう？もう僕達ろくに寝ても無いんじゃないの？ねえ、セイジ」

「………わかった」

ここでヨリを怒らせてもどうしようもない

俺は大人しく頷いて見せて、鞆と荷物を地面に下ろした

「ごめんね、犀川さん疲れたでしょう？」

「いいえ、わたしは別に——」

「疲れてませんか？冗談言うなよな、ココまでくるのに寝ないで二日女の癖に懲りない奴だな」

「ちよっと！セイジ！」

「俺は別に何も言っていないぜ？大体王宮にお住みになられてるのにどうして俺達のお守なんかさせられてるのかわかんないだけだ」

それがわかったらこんな馬鹿みたいな苦労誰がするかよ

俺がそう言つて瞳を閉じかけたとき、彼女――――犀川

也由は切れ切れな声でこう答えた

考えてみればこれがはじめての会話らしい会話だったのかもしれないけれど、俺にはそんなの関係なかった

「すいません、でもコレはわたしの仕事ですから・・・矢木那さんや三木さんと同じようにわたしもこの仕事が大切なんです、だから――――」

「ちょっと、犀川さん、そんなに喋んなくていいよ。もう休んでしたらまた歩けばいいじゃない？ね？まだ全然任務には余裕あるから」

ヨリのそんな言葉が言い終わらないうちに彼女はもう目を閉じて眠っていた

俺はそれを見計らつてから目を閉じて横になった

でもそんなことしても何度も何度もあの映像が頭に焼き付いて離れない

あの日から俺の頭を三条のあの言葉が流れては消える

そう、この女を俺達のお守役に選んだのはまぎれも無い三条 聡太郎だった

何を隠そうこの任務を受けたのはあの収集が架かった夜のこと愕然と立ち尽くすだけだった俺の目の前には五人の人陰が映り込んできた

でも次の瞬間、俺の目の色は一瞬にして変わった
聞こえて来た声はあの鉛色の箱と同じようなアナウンスの声だった

「三条様、わたくしは誰に付けば宜しいのですか？」

「わたしは？」

「わたしは？」

「わたしは？」

機械的な動き

そう、僅かに分かる心音も聞き取れるが小さすぎて判らない
もしかして、という曖昧なものが脳裏をかすめては消えて逝く

そんなはずない

そんなことをすれば——いや、そんなことができるな

らどんな科学者を遣ったって言うんだ？

「セイジ、もしかしてこの人たちって……」

「言うな、ヨリ」

口を開きかけたヨリに俺はきつく言ってからギョツと唇を噛み締
めた

「紹介しよう、この方達は今日からおまえ達を守って下さるボディ
ーガードの皆さんだ」

嘘をつけ、なんてことこの場にいる十人にはとおに分かっている
のに、三条はあえて言う

俺は今にも殴り掛かりそうになる自分の右手を必死で堪えた

「あたし達にそんなの必要ないんじゃないの？三条さん？」

少し機嫌の悪そうな亮奈が腕組みをしながら言った

一同納得のその質問はあつという間に跳ね返される

「だからこそ、だよりヨウナ。今私達は組織で動いてる、分かるか
い？」

三条の問いにリョウナはただ頷いてみせた

「良い子だね。そうだ、組織で動いてる私達が——もし
もこのメンバーの誰かが万が一『壊れた』としたらリョウナ、君な
らこの意味がわかるね？」

「……はい、もちろんです三条さん」

この問いに答えられるのは多分この中の誰一人としていないだろう

それをわかっていて言う三条が俺の中に渦巻く

「組織で動いているとういことはつまりだ、『秘密をもらしてはならない』ということを第一に置くと考えてみようか」

そんな出だしで三条は俺達のボディガード五人に小声で指示をだして、俺達の背後につかせた

俺とヨリの後ろには担当に任命されたであろう女の形をした『モノ』が静かに佇んでいる

「まず、組織は信頼関係で深く結ばれていないと成り立たない。私達は今このビルの最上階にいるが、この下では君たちよりは格が下だが皆がそれぞれの目標に向けて、未来に向けてこの国がもう二度と『あんな過ち』を犯さないようにと最善をつくして頑張っている」

三条の言葉に一同は声も出さずに頷いて背筋を今一度伸ばした

目標——その言葉だけが俺の中にこだまして尾を引いた
少しかけ持ちが揺らぎそうになるけれど、拳を握りしめる事で何とか堪えた

「もしもこの中の誰かがその秘密を外部にもらした、なんてことになったらこの下のかいの連中は日夜没頭していた生活にはもう戻れない——戻るということになればそれはまるで今からは想像も付かないような過酷な日々が待っているからだ。私は君たちにも、私の部下達にもそんな思いはさせたくは無い」

戻る——この場合では多分死ぬことを差しているのだろう、十人が十人とも険しい表情になる

ヨリの顔を俺はどうして上手く見れないんだろう

こんなに近く隣にいるのに

全員の顔を見渡してから、三条はひと呼吸置いてもう一度口を開いた

「だから君達がいつ、どんな状況でどんな状態でここに帰ってくる事があったとしても私は君達の事を誰よりも迎え入れたいと思う」

——だからこの五人の方達をお呼びしたんだ

そういつて三条はリヨウナの肩をばんぽんと叩いた

俺達にずっしり感とした重みがのしかかってくるのがわかる

コイキとトウドウに関してはもう覚悟が決まっていたのか表情は柔らかいが、ユウミやカエデはどこか明後日の方を向いてしまったかのように石のようにいつもの表情はなく、暗く淀んでいた

一方の魔女達は何ごととも無かったかのような顔をしてはいるもののいつもの余裕がなく焦っているのがまるわかりで2人とも固く手を握りあっている

サキとリヨウナは何処か冷めたような顔で三条を真っ直ぐに見ていた

ヨリは悲しそうな瞳で俺の事を見ているだけだった

俺も何も言えなかった

言う事が出来なかった

どんな形でここに帰ってくる事があったとしても三条は言ったそれはすなわちいつ死んでしまってもということの意味していたことを俺達は何を言われなくても分かってしまったのだった

使い捨てられても文句は言えないのが俺達で俺で自分自身で――

もう何年間俺達はこの仕事をして来たんだろう？

切り捨てても切り捨てても溢れ帰るような奴等をいくら片付けたんだろう

もうこんな見張りまがいの監視役が就けられるほどにオンボロなのだろうか俺達は

もう『壊れて』しまうというのだろうか？

俺が物思いに考え耽っていると、三条が次の任務についての話を始めた

そこからはもうよく覚えていなかった

気が付くともう俺は歩きはじめていて、険しい山道を登っていた

女は俺達の後ろを這うようにして付いて来ていたのだった

もううんざりだ

閉じていた瞳を開けると、女もヨリも眠りについていて寝息をたてていた

俺の考えが正しいとするなら、この女はきっと――

そう思った俺は、もう一度瞳を閉じて眠りに付く事にした

涙 動揺 受け止められない僕等

「起きて、セイジ朝だよ」

なんて声がしたのはまだ夜が開けない真っ暗闇な空の色が目前に広がっているだけの

俺の前にひざを付いて座っているだけのヨリだった

「ああ、あいつは？まだ眠ってるのか？」

「うん、よっぽど疲れてたみたいだね」

そう言って微笑むヨリの目線の先には彼女——犀川の姿があった

まだねてるのか

俺がため息をつきかかったとき、突然ヨリの声色が変わった

「ねえ、セイジわかってるんでしょ」

「・・・何が」

俺はなるべくヨリと顔を合わせないようにしながら起き上がって服に付いていたホコリを払った

「犀川 也由が本当はあの四人と違ってることくらい」

いきなり核心に触れるヨリの声は真っ直ぐで強かった

懸命にこつちを見てくる視線に俺は我慢出来なくなって瞳の先をヨリと合わせる

「ああ、気が付いてたよそのくらい。三条のところにいたあの五人の中でこいつだけが格違いだった事くらい」

そうだ、気が付いてた——だからわからなかったんだ

「犀川さん以外は多分本当に——いや、本当にだったらおかしいんだけど、多分身体の8割が・・・」

「人型人工アンドロイドってかんじだった」

躊躇うように濁すヨリの先を俺の口が代弁する

その後には力のない声で「そうだったね」なんていう声が耳に届いた

ヨリは一つ一つを丁寧に思い出すように視線を空へと巡らせる

「心音もしてたし、近くにいて本当に人と一緒にいるみたいな安心感があったんだけど……でも、」

「違和感がある？」

「うん。声も仕草もどこか人らしくない」

——壊れても誰も気が付かないような僕達みたいに安

心感が無くて

——使われなくなったらもう用無しみたいな

「似てる気がしたんだ僕と」

「ヨリ？」

声をかけても、俯いたままのヨリからは何の反応も返ってはいない
俺がヨリの肩に手をかけて軽く叩くと、ヨリは顔を上げた

頬には涙がつたっていた

「ヨリ、お前——？」

「ねえセイジ」

俺の声を遮るように霞んだ声が胸を突いた

いや、深く刺さったと言った方が正しかったのかもしれない

「ねえセイジ、覚えてる？」

だってヨリの泣き顔を見たとき、俺は息が出来ないほど動揺したんだ

「何が？」

半ばよくわからなくなっていた俺はヨリの頬を拭きながらやっと
のことで声を出した

当の本人はまだ瞳からポロポロとビー玉を零している

「はじめて僕達がこの世に生まれた日のこと」

「覚えてるよ」

思い出したくも無かったけれど

俺がため息を付くよりも早く東の空は明るくなりだした

涙 動揺 受け止められない僕等（後書き）

次回よりセイジたちの出生が明かされます

この話はこれがないとわからないやもしれません（笑）

狙い 計画 手にするものの大きさ（前書き）

前回場面よりお話が飛んでるかもみたいなどあるかもしれないですが、次回で全部つながりますので
前回でした予告部分は中盤にございます

狙い 計画 手にするものの大きさ

あたし——犀川也由がナンバーズたちに会う三時間前のこと

あたしには三条様からこんな言葉で話を切り出されていた

「監視……ですか？」

「そうだ、今から言う子供達を四六時中、異変が無いか監視してほしいんだ」

そう言っているのは三条 聡太郎

私達を態々雇った

この国の第三十五代目の王様だ

そんな大それた方がこんな唯の国民を五人だけ集めるなんて何事だろうと思ったら

——子供達を監視してほしいだって？

冗談だろうか？

あたしの中では微かな疑問が渦を巻いている

「どうして俺達をお選びになったんですか？ 聡太郎様」

あたしではない一人の男が頭を下げながら質問をした

少しだけ聞きなれたようなその声に少しだけドキツとしたのは気のせいだったのだろうか？

「ああ、まだそのことについて触れていなかったな、悪い、今説明しよう」

そう言った彼は椅子から立ち上がって、手元にあった資料を秘書に五人に配るように指示した

資料の中身は悲惨なほどに内部の人間なら誰しも知っている事実だった

「まさか……この五人をあつめたのは——」

あたしは慌てて口を押さえた

そんなことが『まだ』あつたなんて……

絶望にも似た色はあたしの視界を覆い尽くして離さない

その時、聰太郎の声がその色の隙間からあたしの耳に届いた

「妹よ、臆する事は何も無い」

「でも……聰太郎様、それじゃ……これではっ」

「今から説明をしようと云つておろう？——皆はあとで他のもの

が伝達に行かせよう、今は一旦部屋に戻っておいてくれないか？」

鶴の一声とは正にこの事

あたしの他の四人は一礼してから一斉に此処を立ち去っていく「

はい三条様」そう言いながら

「なあ也由よ、覚えているか？あの歴史を」

澄んだ部屋の音に、聰太郎の声がやけに大きく響く

「はい、覚えています——『製造』のことですよ……ね？」

「そうだ、今から約千年前——」

時は三××年まだ春の陽気が残る五月のこと

高度経済成長からの日本は着々と成果を挙げ、二××年には世

界に誇るような経済発展を遂げ、財力も景気も全て手にした三××

×年、日本は今まで手を組んできた大国を忠誠心と共に裏切り、他

国との戦争を開始した

裏切られた大国は動揺し、国自体の核心すら揺らいでしまっていた

結果は予想通り日本の圧勝、他国が相手側に付いたものの科学の

前に人間は無力だった

日本も、相手も

そう、世界は無力だ

——日本がついに頂点に立った時

ある問題が起こった

それは人口の減少

これは随分と昔から問題だったが、此処に来て戦争により膨大な規模で人口が減ったのだ

子供が居なくなった国

そう呼ばれるのに時間はかからなかった

この島国の人間達はどれも優秀、機密で繊細

人と違う事を恐れ、穢れを嫌い漆黒の暗闇に満ちていく

未来という『子供達』でさえも

暗闇に染まっていく――

焦った政府は何かに縋りつくようにこの問題を解決するため策を練った

このままでは

このままではこの国はダメになってしまう――

不安と焦りは大人たちに深く、暗い影を落とした

恐れをなした大人たちは国の陰に隠れて何かに導かれるように“子供”を“創った”

そう創ったのだ その手の中で 大量に

生温かい一定の温度、気温

フラスコの中の、ビーカーにある一握りの繊細な命のカケラ

それを人の手で繋ぎ合わせて、紡いでいく

人の命を

人間の血を

血を紡いでいく

『人間』を創っていく

技術が発達しすぎたその時は造作も無いことだった

母のお腹を痛めなければ、両親が望むことも無く

全てが円滑に 子供達は意図的に生まれた ただの数値を上げる
がために

愛情も注がれず、両親も居ない子供達は約千人以上

子供達は政府が建設した施設に預けられ、身体の成長は順調かに
見えた

が、問題が起こった

外見年齢が約十四歳になる頃、子供達に異変がおこった

喉を押さえ、呻き、泣き叫びながら 自らの命を絶ち出したのだ

それも一人ではなく、何百人——何千人もの子供が

その光景は異常と呼ぶに相応しいものだった

なんて滑稽だろうその姿は

その景色は

まるで創った

製造者の大人たちを嘲笑うように

時には周囲の大人達を巻き込んで

死んでいった

人口が一時的に、飛躍的に倍近く増えた翌年

嘲笑うかのように一昨年の半分にも満たない数値が発表された

それと同時に陰で大人たちは処分され、この問題は揉み消された

生き残った数百人の子供達を隠して

死んでいった子供達は“失敗作”だった

生き残ってしまった“子供達”をどうするのか――
そんな問題を抱えたまま
この問題は陰でこっそりと終わりを告げた

「――そしてその子供達は……」

「今も生きている」

「そう……だ。俺の指揮下でな」

「お兄様の部下ですもの、信用はしています……ですが――」
「本当に千年も生き続けているのか――ということか？」

「はい……つまらない質問を申し訳ありません、兄上、ですが……」

聰太郎は「皆まで言うな」とあたしを窘めてから「お兄様と呼べと言ってるだろう？」と言いながら笑った

「は？え？あ、はい。すみません聰太郎様」

「いいえ、姫様、分かれば宜しい」

「はあ……」

冗談が好きな聰太郎らしい

あたしは軽く微笑してから聰太郎の言葉を待った

「そうだな、お前の言い分も分からは無い、私自身そう思う気持ちのほうが強いからな――だが……」

「なにか？」

聰太郎は一瞬だけ躊躇いを見せたが、次の瞬間には跡形も無く消えていた

「私はラフィの――世界の言った全てを信じたい」

「それはわかっています、あたしも――」

息を呑むほどに、ゆっくりと時間は過ぎていく

「では、也由はトップの二人に着けてやろう、これで大丈夫だ心配

するなよ？ああ見えてあの二人は意外としつかりしてるから問題は無いだろうしな」

「ありがとうございますお兄様」

「ではお姫様私からの任務、全うしてくださいますか？」

「Yes, with your reputation」

「宜しい」

聰太郎の顔は笑みに満ちていた

「つまらないものだな」

こつも簡単に操れてしまう物なのだな人間でさえ……
私がそう思ったとき、後方で声がした

「なにがですか？」

京都なまりがまじったようなその声の主は回り込んで来て私の顔をジッと見やる

「なにがつまらないんですか？三条はん？」

「いいや、計画が思ったよりも順調でね。すこし心配になったただけなんだ」

「そないな風にはみえませんがねえ。つまらないなら秘書の僕があいてしましょか？」

そういう少年——私の秘書、『カナメ』はニコッと笑い

ながら資料をバタバタとデスクに運び込んでいる

「いいや、大丈夫だ。君も忙しいみたいだしね」

私がそう言い終わった途端、彼の表情は曇る

「そないなこと言わんでくださいよお三条はん。僕これでもアンドロイドですよ？全然疲れませんし、寧ろ仕事ないと困るんですから」

「ああ、悪いなカナメ」

「もういいですよ、お仕事頑張ってくださいネ。僕はまたセイジくんの後処理ですから下の方行つて来ますわ」

「頼むよ」

そこまで言いかけたとき、どうしてか私はカナメを引き止めてしまった

「——カナメ、」

「はい？なんですか？」

「いや、」

言いかけたはいいいものの、次の言葉が出てこない

そんなとき、カナメの脳味噌に私の言葉を先読みされてしまった
「監視役に自分の妹さんつこていいかあいうことですか？」

「ああ、手が足りなかったのもあつたんだが今の私の手元にはお前以外にはアンドロイドがどうやっても四人しか手配する事が出来なくてね、也由に任せてしまった」

あの子には綺麗な世界であつて欲しかったのに、このままでは汚い世界を見せてしまう気がする——

不安感が私の気持ちを煽つたのか、不意にため息が出る

「監視役といつたつて過酷なのにかわりなんかにな。たった一人の家族でさえも自分の野望の道具に変えてしまったのかと考えると少しな」

「胸が痛むんですか、三条はんは」

カナメの問いに私はどこか正直に答える事が出来なかった

ただ曖昧に「ああ」としか返事することしか出来なかった自分が少しだけ恥ずかしかった

そんな時、目の前の彼は優しく微笑みながらこう言ったのだ

「むしろそのくらいでいいんとちゃいます？三条はんは」

「カナメ？」

「だって正直正義のヒーローな訳でも無い訳ですし、目指しはってんのは神様でしょう」

そう続けるカナメはドアに手をかけながら笑った

「神様になりたいってお方がそんな弱気だったら僕がお使いしてる意味ないじゃないですか。まあどうせ妹さんつかうんだったら僕使ってもらっても良かったんですけどネ」

「ははは、それだったら私が困るよお前以外に誰がいるっていうんだ」

私がそういうと、カナメは驚いたように目を見開いた

そんな姿を見ると、本当の人間のように見えてしまうのは私だけだろうか？

「ほんに嬉しいお言葉ありがとうございます。いわれなくても壊れるまで三条はんに使える気持ちですよ」

じゃあいつてきますね

そう言ってドアの向こうに消える彼を見送ってから、私は深くイスに腰掛けた

狙い 計画 手にするものの大きさ（後書き）

どうだったでしょうか？

国王が思っ思惑とは？セイジたちがなぜ千年も生き続けているのか？
さてそんなお話は次回ということで宜しくお願いします

昔話

呼吸とともにグラスを置いて俺はヨリの方へ押しやった

中に入っている液体が、タプタプと跳ねて中でゆれていた

か細い声でヨリはそれを受け取りながらありがとうと言って、俺の前にしゃがみ込んだ

犀川はまだねていて、テントの中で毛布にくるまっている

俺の片手に持っていたもうひとつのグラスがカチャン、と音をたてて微かに動いた

少し驚いて顔を上げると、そこには嬉しそうなヨリの顔があった
「乾杯」

それだけ言つて、彼は一気に飲み干した
まずそんな顔をする。当然なのだけれどこれはあまり飲めた物では無かった

「このあいだのよりは数倍美味しいかもね」

創った人くろうしただろうなあ、なんて暢気な台詞をヨリは吐いた
「なんで、そんなこと言うんだよ」

俺は半ば、いやそれ以上だったのかもしれないけれど自棄になつたかムキになつたでそんな言葉が口を突いて出てしまったことに言つた後でひどく公開した

だつてそこには悲しそうな顔があつたから

「どうしたの、赤蝶せいてらしくもない」

「らしくない？じゃあなんだよ、何なんだよ」

ヨリの顔を見れなかった、見たく無かった
負けてしまう気がした

コイツの瞳は時々綺麗すぎる。見たく無い物までそれを通して自分まで見てるようで嫌な感じがする

背けた自分の顔ほど情けない物は無かった

「なにが？」

俺の問いに真っ直ぐな声が返ってきたのは日が昇ってきた直後で、テントの外から滲んだような明かりが漏れはじめていた

「何がってそれに決まってるだろ」

俺はヨリが手にしているグラスを指差した「ああ、」というヨリの声が耳に残る

「『栄養剤^{てきあつぷじつ}』？仕方ないでしょ、僕達コレが無かったら一体どうやって『正常^{ふつう}』を保って生きて行けるの？」

僕達はこれからも一生^{ずっと}コレに頼って生きていかなくちゃしようがないでしょ

言われてる意味は分かるのに、どうしても賛同出来なかった

嫌だった事実も現実もヨリの口からこんな言葉で返されるのも、夢だと思いたい自分がいるのも――

「俺達は、」

気がついたら叫んでたなんて思いたく無い

せめて犀川が起きないように声を押し殺すのが精一杯だった

「俺は創られたんだ身体も命も^{じみん}――」

俺は手に持っていたグラスの中身を喉奥へ流し込んだ

むせ返りそうな吐き気と気分の悪さが充満する。酷い味がする

「セイジ、僕だっけ言いたいことくらい分かってるつもりだよ。だって実際に僕達は能が破壊されない限り死にはしないし傷は通常の人の何倍ものスピードで治る、それに食べ物^{食べ物}は三日に一度で十分だ」
淡々とヨリは俺を見ながら口を開きはじめた

言い分けのようにきこえるけれど、それは俺を落ち着かせるためのことだったのも同時にわかった

声が出なかった

「十四歳になるころには僕達^{サイバーチルドレン}みたいな子供達は人々を巻き込んで死んで逝く。そんなこと千年前から知ってる、でもさセイジ」

そこで一旦ヨリは話を切って俺の手からグラスを抜き取った

力を込めて握っていたせいか、俺の手には血が滲みはじめでいてグラスは割れて血が滲んでいた。暗い紅色が手元を伝う

「どうしてか僕達は生き残っちゃったんだ。十四歳になったあの日全てが終わると思ったのに今こうして呼吸をして生きてるんだ」

そう、生きている俺は俺達は

あの十四歳になったあの日、周囲の環境も支え合っていた仲間も全てが変わって色んな物が俺の中で色あせて終わっていった

隔離されて、箱詰めになった俺達は次の瞬間からいままで仲間として接してきたやつらと殺しあいをした

正確には、俺はただ身を守ることだけで精一杯だった

殺らなければ殺られる箱のなかで逃げまどっていた

助けなど無かった。ただわかったのは、大人達が頭を抱えて失敗作だったと言った言葉だけだった

捨てられるのか、それとも俺もこんな風になるのか

『あああああああつあああつあああああつあああああ』

突然叫び声が聴こえたときから俺の意識はなかった。気が付いた時には真っ白で政府の施設にガチガチに貼付けられた状態だった
「ねえ、セイジ」

ヨリの声が聴こえたその刹那、俺は記憶の蓋をこじ開けていた

戻せない時間

時間だけが逆に流れたように俺は昔の景色の中に立っていた気が付くと、と言った方が正しかったのかもしれない
正確には客観的に昔の自分を見ていた

今から千年前の当時は俺はまだ十四歳だった

何も知らないただの甘えたガキの一人だった

そのころからあの酷い味よりも不味い栄養剤を飲まされていたけれど、そのころ孤児院にいた俺は「身体が弱いから」とか「早く治る薬」とかそんな大人の言葉にだまされて飲み続けていた

結果的にこの栄養剤のおかげで俺は今まで生きることが出来ただけれど今考えてみるとどうしてもそのことだけが勘に触る

この栄養剤は実験台^{モルモット}になった約数十人の子供達だけが飲まされ続けていたもので、その他の何千人の子供は飲まされていなかった

成分はその個人によって分けられていて、生き残った俺達――
――ヨリ、リヨウナ、カエデ、コイキ、トウヤ、ララ、ルル、キサ、ユウミと俺の十人だけが同じグループに割り当てられていて、同じ物を飲んでいた

これが偶然だったのか必然だったのかは良く判らない

この栄養剤には知的能力や自己抑制能力、運動能力を高めるなどの効果があったようだが、大半は十四歳になったときにどれだけ自分自身の異常反応を抑えられるのかというのが狙いだったようだ。
現に俺はこうして生きている

その当時の俺達孤児院の子供達は異常に勉強もスポーツもできていた

このことに大人達が気が付かなかった訳がなく、改良を施した遺伝子の成功に喜んでいた

俺達が傷を追っ手もすぐに治癒したり、再生能力が異常だったのもその原因の一つだったのだろう

でもそれは俺達が十四歳になった次の瞬間から覆されることになる

箱詰めになされて、運が良く助かって殺されずにすんだ俺達は気が付くと血まみれのままベットに貼付けられていた

手足を固定されて起き上がれない状態だった

瞳を動かすと俺は広い部屋に何人もが同じ状態で居ることがわかった

ただ、日に日にそのかずは衰えはじめた

原因は、異常反応だった

「うっ ああああう」

ある日真つ白な部屋で低いうめき声が上がった

そう、異常反応を免れたかに見えた俺達だったが、実はその作用はいっ訪れるかわからないものだったのだ

栄養剤が二日も切れれば、子供達は一悪魔（死人）に姿をかえるのだ

そのことが分かってからというものの、解放された俺達十人はこの液体を飲まなければ死んでしまうことを―――ただの殺戮機械

になってしまうことを自覚した

絶望感にかられるのと同時にもう後が無い道を歩かされているのだと実感した

怖かった、そして寂しかった

生きているのに人と同じ理で生きることが出来ない

超人的な力を持ち、いつまで生きていられるのかわからない

いつ人を殺してしまうかわからない不安と孤独と

なんの愛情も知らずに生きてきた悲しさが異常なほどに胸に突き刺さった

当然国が俺達を匿ってくれることもなく、俺達は一人の男に引き取られた

独裁政治になりかけていた日本で最も力を持つ、それから七年後に王となった

三條 蘭太郎らんたろうという男だった

彼は国民からあつい支持があつたが、俺達には冷たかった、というよりも道具扱いだった

蘭太郎は俺達を使って戦争も手を汚したく無い仕事もさせた機械のように俺達は日々を過ごしてきた

この千年の間、機械的にただ黒い部分を白く塗り替えてきた国王に悪い噂があれば元から絶ち、戦争に出向けば人を殺したそこら辺の昔で言うマフィアとかわらなかった

『人間』じゃない気がした

予期

「セイジ？」

声がして、顔を上げた

ヨリの顔が在って、空気が澄んでいた

「悪い、怒鳴ったりして」

頭を冷やせ、こんな場所でヨリを責め立ててどうする？ 一体そんなことをしてなんの利点メリットがあるんだ？

昔のことなんか今は関係無い

どうせ時間なんて戻せない

あれは戻らない時間だし、大体こんな任務しごと千年も同じようなことしてたら嫌でも慣れてくるだろ？ 今更駄々をこねてどうするっていうんだよ

こんなこととしても三条に頭上がるわけじゃないんだろ？

言い聞かせたのは自分のためじゃ無い、ヨリのためじゃない――

いつか壊れる命いのちのためだ

俺が手元を拭くと、少しキョトンとしたようなヨリの顔が見えた
「何」

短くそう言うと、なんだか怪訝そうな声が聞こえる

「いや、何かもう少しこう……何て言うのかな、」

はははと頼りなく笑うヨリはすまなそうに頭をかいた。橙の髪の毛がさらさらと揺れる

「セイジ怒ってるみたいだから、何か抑えるの大変かなあって思ってたさ」

でもなんかもう自己解決ふっきれてるみたいだから

「よかったね」

そういつていつもの笑顔を見せた

あつたかくなる気がして俺は少しの間だけ瞳を閉じた

心臓に手を当てて、流れる鼓動を確かめる

生きてる、確かに俺は生きてる。人ではないのかもしれないけれど

「っ！」

俺が目を開けたその刹那、ヨリの声が止まった

途端表情は硬くなって口元から笑みは消えていく

「？ヨリ？」

どうした？までは言わなくてもわかった

「来るのか——」

ターゲットが

俺はショルダーに手をかけた

予期（後書き）

今回は少し短かったのやもしれません
次回からは少しずつ子供達の。。。能力が！みたいな感じですのでど
うぞ宜しく（笑）

後の無い男

「ぜえっはあっあぜうゝ あはあっ！」

一人の男が朝日を浴びながら急斜面の中を降りてきた

肩で息をしながら走るその姿はどこか焦っているようにも見えた
年齢は三十歳から三十五歳前後で、短く切った髪の毛と良い具合
に日焼けした肌が真つ黒なそでから見える

男の名前は堤^{つみ} 大輔^{だいすけ}

つい先日まで三条の部下として勤務していた事務の一人である
が、三日ほど前彼とともに数億円というある『モノ』がきれいさ
っぱり無くなっていた

巧みに裏工作されたのもあつて発見に手間どつたがどうやら三条
がしつぽを掴んだのも在つてこの三岳山に逃げ込んだという情報が
手に入ったらしい

多分この山のどこかで密売でもするんだらうということは誰にで
も安易に予想が出来たが、それはしてはならないことだった

『何としても阻止しなければ』――

三条の言葉が耳鳴りのように聴こえた気がした

堤が持ち出したある『モノ』、それは――

「セイジ、くるよ」

手にかけた拳銃をショルダーから抜き取ったとき、ヨリの声が後
ろの方から響いた

背中合わせに伝わってくる体温が今は凍り付くように気持ちを冷
やす

「ああ、
ターゲッ

堤 大輔は辺りを見回してから、一軒の屋敷に入った

こつちには気が付いていないようだった

俺達はテントに犀川を残したまま、堤を追ってきた
流石に同業者じゃないだけあってここまでは順調だ

「じゃあ、今回の任務確認するよ」

「急げよ」

俺は持つている二つのものに弾丸をつめ直しながら息を殺した

ヨリは低い体制のまま、頬杖をつきながら欠伸をする

「今回は堤が持ち出した『資料』を奪還することと、密売人が居た
場合の始末、ルートの排除と屋敷の除去、ターゲットを生きたまま
捕獲すること、だよ。一つでも落としたらマイナスポイントだって
マイナスポイントとは俺達の場合下位になることを示している。

要は給料の減給と赤蝶の剥奪

使い捨ての俺達は三条の玩具なのだ、気を抜こうものなら明日か
ら息が出来なくなると考えてもおかしくなかった

俺はガシャンという音で弾丸をはめ込んだ。嫌に重い空気が背中
に張り付いてくる気がしたのをふり払って、立ち上がった

「行くか」

俺達は屋敷に向かって歩き出した

「このくらいだ。額はこれでいいか？」

「ああ、十分だ」

「この使用済みという部分さえ守ってくれば良い」

「他は問題ないか？」

「最低限この資料だけは使った後燃やして消し去ってくれると約束
してくれ」

「?、何故だ？」

「それは――」

部屋の隅で数人の男が話し込んでいた

堤は一人現金を手にして薄ら笑いを浮かべながら密売人に向かって口を開きかけたその時だった

バンッ

乾いた音が聴こえた

「今は――」

その先は言わなくても分かった

その刹那、ドアが開いた

入ってきたのは密売人の連れ5人のうちの一人で入り口の番をしていた者だった

入ってきたのがその男だったので気分が緩んだが、その場に居た誰もが身震いした

それは乾いた音を知っていたからだった

「誰かが入り込んだぞ！警察じゃ無い！若い坊主^{ガキ}2人だ！」

荒い足音で階段を上ってきた密売人の連れの男が肩から血を流しながら言う

堤はその傷を見て、この場に足を踏み入れたのが誰なのかが一瞬で分かった

「三木、星爾――？」

まさか、そんなはずはない。サイバーチルドレンがこんな任務に出向くはずが無い。それにしても最高の始末人^{せんねん}とまで謳^{こゝろし}われた赤蝶^{みき}がこんな場所に来るなんて思えない。この髑^{むく}るような撃ち込み方は・

堤は手短にあったライフルを手にとった

――ここまで俺はきてしまったんだ。後戻りは出来ない
戻れば生きていられる保証は無い

逃げれば、ここで生き残れるか判らない

やるしか、ない

堤は息を深く吐いてから口を開けた

「良く聞いてくれ、ここまで追われでもしたらもう後も先も無い」
今からその2人を殺らなくては

堤はゆっくりとその部屋からあしを踏み出した

乾いた音

———銃声が響いた

狩りのハジマリ（前書き）

もしかしたら次回辺りから残酷な写生を含むかもしれませんので
注意を！

狩りのハジマリ

ドアを開けると、そこは何も無いただの廃虚だった
音を立てないように壁に背中をあてる

割れたガラスにホコリの臭いが鼻についた

「ヨリ、ここの持ち主は？」

「大分前に亡くなってるよ。今はこの屋敷には誰も住んでないし、
壊されるような予定も無いみたい」

まあ山の中だから誰も手をつけたくないっていうのもあるのかも
ね。そう言ってヨリが微笑んだ時、微かな音がパリンツと響いた

ドクンツ

俺の心臓が悲鳴にも似たかな切り声を上げる

隠れるようにして息を殺した俺達の前に一人の男の影が見えた

どうやら堤では^{ターゲット}ないらしい

今なら騒がれずに——そう思った俺は迷わずに男の頭目
掛けて構えたがヨリにその手を止められた。

「なにするんだよ」という言葉は言われなくても分かった

『ターゲットは生きたまま捕獲』という任務事項を思い出した。

今音を立てればかならず先手を打たれる……俺は舌打
ちをしたい気分^{ターゲット}に駆られた

男は密売人のひとりらしく、多分見張りの役目を任されたのだろ
う。だとしたら腕っぷしが強いのはまず考えられない。何かあった
時、まっ先に仲間に伝えることを最優先するはずだ

ここで殺るか泳がせてから詰むか——

男は床に広がるガラスを踏み付けながら意気揚々と鼻歌を唄いは
じめた

緊張感の無い見張り番だな、

言うよりも早く、俺は男の前に拳銃を向けたまま飛び出していた
「だっ誰だお前は！」

戸惑ったような男の口調。銃口を向けられて焦っているのか、それともガキが手にしているものがあまりにも嘘っぽいのか

「コードno.0、『赤蝶』とても名乗っておくか」

俺は短く切り捨てた

歪に男の口元が歪んだ

「は？何言ってるんだお前——？」

ふざけてんのか？までは言わせなかった

俺の指が微かに動く

乾いた音が耳に響いて全身を凍らせた

次の瞬間、男の肩からは血が吹き出していた

「うっ あっ」

短い悲鳴と共に男は床に崩れ落ちる

おい、まだなんだよ。お前の仕事はこんなもんじゃないんだぜ
案内してくれよ早く、

「なあ」

「ひい………っ」

俺がそう言っただけ構えをみると、男は肩を押さえながら走り出していた

「セイジやりすぎ」

途端、後ろから声がした

「そうか？いつもよりはましだろ」

機嫌の悪いヨリの顔がそこにあった

「撃つことなかったよ。少なくともあんな髑髏のような撃ち方しなくてよかった、あんなことしたら誰が此処に来たかなんてターゲットに丸解りじゃないか」

何やってんのセイジ、これはゲームじゃないよ

「未来のための任務だよ」

ヨリはどうして俺がワザと肩に銃弾を当てたのか分かってた。
普通の殺し屋ならまずそんなことしなかっただろう。迷わずに脳天に狙いを定め、引き金を弾くはずだ

もしもセイジのようなことをしてしまえば後々になって自分にリスクがかかるからだ。敵の数が判らない以上最優先されるべきは任務の遂行と自分の命だ。出会った相手との潰し合いがセオリー通りだし、もし仮に捕らえられてしまった場合自分自身から仲間そしきの情報が漏れてしまう可能性がある

でもセイジはそうしようとは思はない

ヨリにはその底意地の悪い意図が良く分かってた

「案内、させる気だったの？」

「ああ、探すのは面倒だ」

そういつてセイジは床を指差した

床には一面、あの男の血の跡が広がっていて真紅の薔薇を咲かせたような赤が燃え上がるように男の足跡として残っていた

走り去った靴跡にその赤が移っている

「これを辿ればターゲットのいる部屋まで着くんだろ？」

そこに資料もあるだろ

「みつけたら、今度はヨリ—— お前の『能力』使ったからな。手出すなよ」

「・・・わかってるよ」

ヨリは小さく溜息を吐いて喉元まできた本音を押し込んだ
心臓が主張を速める

さあ 狩りのはじまりだ

狩人は右手に宝を持って左手には毒をもって
満月の晩瞳の奥を真紅に染めて狼を獏る

獲物の牙は空までは届かない

さあ 狩りのはじまりだ

狩りのハジマリ（後書き）

いろんな意味ででろでろな感じで申し訳ないです

赤い道

カチャリ、と足下で不用意にガラスが音をたてた
冷たい空気と濁ったような煙りの臭いに僕は鼻を摘みたい気分だった

気持が悪い

思ったのは僕だけじゃないみたいだった
前を歩いていたはずのセイジと視線が重なる

「別に気使って我慢してなくていいぜ、」

俺もそうするから。そう言われてる気がするのは僕の思い上がり
だろうか？何にせよ僕は溜め込んでいた咳をいっぺんに吐き出して
げぼげぼと汚い咳をした

喉の奥がすこしすつきりした気がする

ホコリの臭いに喉の方が先に参ったみたいだ

なんてそんなこと言ってしまうたらよかったんだけど、もうこんな
なに音をたてている時点で僕は周りに此処に僕達がいることを示
してしまっている

さっきの男を見たところで押し殺してしまった台詞を思い出した
『弾丸の跡があった』

『あの男のモノじゃ無い血の跡も』

『腐ったような微かな臭い』

『気配の無いものが在る気がした』

言いたかったのにどうしてかセイジに伝えそびれてしまったのを
大分後悔していた

もしかしたら、という可能性のなしをするのはあまり好きでは
なかった

でも、そう本当にもしかしたら――

「もしかしたらこの屋敷に入ってきたのは僕達だけじゃないのかもしれない」

床にはあの男のものでない血痕に違った臭いが混じっていた
気が付いた事を言った方がよかったのだろうか？可能性なんてあ
いまいなもの話をしたほうがよかったのだろうか？
判らない疑問だけが身体の中を渦巻いては気分の悪さを促した

「もしかしたらこの屋敷に入ってきたのは僕達だけじゃないのかもしれない」

床にはあの男のものでない血痕に違った臭いが混じっていた
気が付いた事を言った方がよかったのだろうか？可能性なんてあ
いまいなもの話をしたほうがよかったのだろうか？

判らない疑問だけが身体の中を渦巻いては気分の悪さを促した

「ヨリ、」

不意に名前を呼ばれてドキッと心臓が軋んだ音をたてた

「なに、セイジ」

声が擦れる。もう今にも息が詰まりそうだ

僕の声にセイジは不思議そうに首を傾けた

「いや、もう着いたんだけどって」

そう言って足下を指差しながら軽く手首を回して銃口をドアに当てた

さっきまでたどってきた赤い男の足跡は無くなっていて、消え入るようにその先のドアの向こうへ消えていた

案内が終わつた事を意味していた

僕は慌ててセイジよ後ろにぴったりと重なるようにつく

心臓が主張を速めた

脈が身体を駆けるたびにセイジが持っている黒い塊が視界に入る
たびに怖くなる自分と逃げ出したく自分を抑える

逃げるわけにはいかないんだ

ここが僕の最低ライン　生きていくという証　人間である時間

今から僕の任務がはじまるんだ、逃げるな

セイジの指が引き金にかかる

数秒後には音がして、このドアは散ってしまうんだろう

そしてなかにいる人たちと――

セイジの仕事が終わったら、僕は堤と……

大きく息を吐いた

決めなければ

覚悟も未来も

セイジの指がゆっくり動いた

発見

バアアアアアアンツ――

余韻のように耳鳴りが左の方へと翔て逝く
終わって行く音は、ドアの破片と一緒に粉々になって床へ落ちて
行った

バラバラと汚い音を出して崩れ落ちるドアを俺は踏み倒した
粉々の破片が無惨にも俺達を中へ引き込んだ
約20メートル四方ありそうな部屋

誰かがいると仮定しておかしくはないだろう

俺は部屋へ入って、ヨリを後ろへつかせた

湿ったような臭いとかかの薬品の臭いが充満していて息苦しい
軽く吐かれたヨリの吐息に歯痒いようにいきを漏す気配が在る事
に気付いた俺達は真っ直ぐに視線を前へと押し出した

目の前に望んだ男が立っていた

「堤 大輔……」

無意識に口が動いて名前を呟いていた

ターゲットを見つけた 嬉しさではない喜びと悔しさではない虚
しさが手首に力を込めた

俺の手がもう一度引き金に触れる

さて、どうしたものか

カチャリ、と俺の手元が音をたてたとき、ゾロゾロと数人の男達
が堤の後ろから出てきた

どうやら一戦交える気らしい

勝つかなんてそんなことあいつらには目に見えた結果を知ってる
だろうに

死にたいのか？生きたいのか？

「なんだ、腐っても生きたいってか？お世辞にも良いお手本とはいえないな」

逝きたいのかよお前ら

吐き捨てるように言った俺の台詞が気に入らなかったのか、堤は握った拳を震わせて俺に散弾銃を向ける

竄れた顔の堤の瞳が

血走った目が大きく見開かれた

「う……五月蠅い！お前達さえ居なければっ私は、私は――」

震える両手で拳銃を俺の方へと向ける

距離5メートル

たったこれだけの距離で目の前の男は

人を殺した事もないこの男は俺を撃とうというのか

金の力は人の命にも勝るのか

不思議と笑みがもれる

「セイジ？」

ヨリの声も遠く感じる

俺は「すぐ済む」とだけいって軽く首をひねった

そのとき、何かの糸が切れたかのように堤の笑いが聴こえた

壊れるのか、壊れていたのか俺にはわからなかった

ただ聴こえたのはもう一生聞きたく無いと思えるような男の声

「殺せ！この餓鬼を生かすな！！」

喉を潰しそうな声で堤は叫んだ

男達は俺達を取り囲むように銃口を向けて近寄ってくる

けど遅いよ

俺は手短に居た男の脳天目掛けて足下に在ったドアの破片を投げ付けた

体勢を崩した男は持っていたライフルを手からすべらせる

俺はヨリの近くに居た男達の足に数発銃弾を浴びせてから落ちてきたライフルを手にとってそのまま弾丸を体勢の崩れた男の顔面に撃ちあてた

パンツと乾いた音がした

後ろから叫び声にも似た泣き声のような悲鳴が聴こえてくる

「この餓鬼――！」

足から血を流した男達が一斉に飛びかかってきた

ヨリを俺の背中に回して一番遠くの奴の視界を覆うように羽織っていたジャケットを投げる

同時に目の前の男三人の頭に乱暴にライフルを鳴らした

息をつく暇もなくジャケットと手で払った男がまっ先に俺の後ろ

――ヨリに狙いを定めて撃ち放した

俺は迷わずに自分の左手を差し出して男目掛けて銃弾が切れるまで撃ち放していた

何かを掌が受け止める

自分の掌を何かが貫く音がした

同時に目の前の男も倒れていて床には数滴自分の赤が落ちていた
掌に傷は無い

慌てた声が後ろから聴こえた

「セイジっ」

無理やり左手を乱暴に引っ張られる

「さがれ、まだ終わってない」

「でもっ」

「ヨリ」

右手に堤を定めながら俺は強く言った

黙るヨリの腕が左手に絡んでいる

左手の生温かい感触をはらって力チャリ、と堤に銃口を向けた

「なあ、逝きたいのか？」

「ひ……っ」

俺の口元は歪に曲がった

おびえたようなターゲットの顔が見えた

ドクンッ ドクンッ ドクンッ

心臓に新しい血が巡っては俺の呼吸を荒くする

手の中にある黒い塊が俺の熱を吸い取って熱くなる

ここが俺の存在理由 生きる価値 生きているという証拠
人としての最低ライン

青ざめて行く堤に俺はゆっくりと近づいた

「^{もじ}孵らせてやるよ」

さあ 狩りのはじまりだ

入り口

さあ夢の話をしよう

思い出したのはそんなころ

まだ明日に希望をもっていた幼い

ただどこまでも馬鹿みただった自分だったころ

明日が何かもわからずにただ空をみあげては夕焼けに頬を染めては
手を突き上げた

高く、そう誰よりも高く空に届くように

祈りながら願ってた

途方もない祈りに聴こえた

まだ全部を信じ込んでいてなんの疑いも疑問もなくて

見上げた空の青さだけ世界の事を信じてた

壊れるのなんて唯の一瞬なくせに青い分だけ見上げてた

まだ何も知らなかった

どうして空が青いのかなんて

なんで明日がくると思ってたのかなんて

祈りながら願ったあの日でさえも

知らなかった自分が居た

気が付いたのはもう空が赤い

そう、今になってから

全部壊れてもう戻ってんなんてこなくて
帰りたい

なんて、

もう言えない

朝、こんこんとリズム良く鳴るドアの音で目が覚めた

ノックの音は次第に乱暴になってぴたりと止んだ

聞こえが遠のく気がして、でも起き上がれない自分の身体は布団の中に包まっていたまま

痺れるような微かに寒いような感覚に、自分のがらりと唸る喉を摩った

奥の方が少し痛い

暖房が効き過ぎたのだろうか

「起きてる……」

押し殺したような声に自分でもびっくりした

風邪かな、と思ったところで声がした

「はやくしろよ、飯できてる」

無愛想、というか苛立ったようにそんな声がドアの向こう側から響いてたんだという足音が遠のいて行く

消えるように気配が消えればまた瞳を閉じた

だるい……のは多分気のせいだ

言い聞かせないと起きるのも難しい

もし風邪だったとしたらなんだっていうのだ、今日はそんなこと言っただけの場合だったわけ？

「違うだろ」

って多分セイジだったら言うのだろうかとかそんな事を考えている間にフワリ、と身体が宙に浮いた気がした

ああ、僕は帰ってきたんだっただけ自分の部屋に

僕のベッドの周りには足の踏み場も無いくらいのコードと配線が鏝められていた

ターゲット 堤 大輔を確保したのは昨日の明け方

まだ日が昇って浅い午前七時のことだった

「俺を殺してもあの資料は戻ってこないぞっ！本当だ！嘘じゃ無い！」

信じてくれ！俺はまだ何もしてない！

震える男の足は今にも折れそうに疼いて、手に持っている散弾銃すらすでに床に落としてしまっているような始末だった

さて、というような溜息をセイジは男に向けてから一発

手元が力チャリ、と音を立てた

その刹那

男の頬を何かが掠めた

「うあっ」

嗚咽にも似た悲鳴のような声がもれる口を手で覆いながら男はぶるぶると震えながら後ろに倒れた

もはや声も出ないのだろう

そのことを察してか、セイジは俺を見やって「早くしろよ」と促した

「うん、」

それだけ言って、僕はゆっくりとターゲットに近づいた

「堤さん」

ごめんなさい

「今から僕は――」

「くっ来るなっ近づくなああっ！」

叫ぶ男の額に、僕は自分の血で十字を書いてからその中心を人さし指でなぞった

途端、目の前が真っ暗になって目の前には規則正しく真四角が並んだドアが見えた

さっきの銃声が嘘のようにそこは静かで、周りには堤も、セイジも誰も居ない

そう、僕だけ

唇が無意識に動いた

ごめんなさい

「今から僕は――」

あなたの心いのちに入ります

入り口（後書き）

更新が遅くなって申し訳ありません

つかあれです、意味のわからんのは多めに見て下さい（笑）

さて、今回はどうしてこんなわけわからん展開になったんのがご説明できればな、と思っております

次回までもうちよい時間がかかるかもしれませんがその点はご了承くださいまし

短いお話ですいませんでした

あたたかい君の頬に触れる時、今俺は「人」で居られる気がする

堤がぼかんと口を開けて、両目を見開いたままになってからもう随分経つ

長い、と思うのは多分こういうのが最近ではなかったからだろうか？それとも心配のしすぎか、はたまた俺が過保護すぎるのだろうか？なんてことを考えながら俺の横で倒れている

いや、正確には眠っているヨリを見ていた

膝をついたまま、がつくりと両肩を落として上を見上げている絶望的な表情の堤とは対照的にその顔は安らかで閉じた瞼には薄らと雪が積もったような睫毛が長く付いている

今、ヨリはどのドアを開けたのだろうか

思った途端しやがみ込んで自分の上着をヨリの肩にかけた

ただ、考えていた事はぶつとりと途切れて下のほうからたんたんとという足音が聴こえたからだった

ただ、その足音の主が誰なのかがすぐに分かってしまったため、俺はあえてシヨルダーに銃を仕舞わなかった

だんだんと乱暴に階段を駆け上がって来る音がする

どうして迷わずにこの広い屋敷の中を真っ直ぐにここまで来れてしまえるのかがついさつきでわかってしまったこともあって、俺は酷く後悔していた

ああ、案内をあんなやつに頼むんじや無かった

間違い、とはいかないものの間違えたような気分になってしまっ

まあいいだろうと思った所で足音が近くなってきた

あともう少し

30秒 — 20、 —

「5、4、3、2、1」

ジャスト

ガラガラ、というドアの破片を踏み付けながら女が一人息を気らし
て入ってきた

「だっ大丈夫ですかっ!？」

髪の長い女

目でわかった、というかその前からわかっていた

「へえ、意外と体力あるじゃん犀川さん」

入ってきたのは犀川 也由、さっきテントに置いてきたあの女だ
予想は大体の所ついていた

俺達の監視役

いや、むしろ見張り役だったんだ、追って来ないはずもないだろ
うし

まさか三条の命を裏切って背くような女にも見えなかった

それにこの山にはどう考えても人なんて今の時間帯にいる訳も無い
でなかったら銃なんてむやみやたらに発砲しないし、堤達もここ
で資料を売ろうとなんてしなかっただろう

結果的には俺達にその計画ごと消された訳だけど

消去法でいこうがなにしようがこの女以外に此処に来るような理
由の奴がいなくてことと、あんな足音全開で踏み込むような馬鹿
な奴は俺達の世界ではありえないってこと

この二択に当てはまる女はこいつしかいないってこと

そうそれだけ、ただ気に入らないのはこぎれいすぎるその態度だけ
俺が溜息をつくかつかないかで犀川は切れた息を整えながらこっ
ちに近づいてきた

「ヨリさん何か怪我でもしたんですかっ?」

「べつに、今仕事してる」

「?、仕事って? 今、ですか?」

ああ、そうかこいつにそんな話しても意味が通じないことをす
っかり忘れていた

面倒だ。けれど説明しなければ三条から降格をくらうかもしれない

マイナスポイント

舌打ちをしたい気持ちを抑えつつ、俺は奥歯を噛み締めた

「能力、聞いた事無いのか？」

「はぁ、」

本当、面倒くさいコイツ

思うのと、溜息が出るのはほぼ一緒だった

「能力っていうのはつまり、俺達に備わってる通常の人間とは違う特殊能力をいうわけ」

「傷の治癒が著しく早かったり、成長が遅かったりすることですか？」

「まあそれもあるけど、俺達の中でもそういうのは分けられる」

俺は自分のショルダーからナイフを取り出した

一番細くて中途半端な長さの鋭利に輝く銀色は俺の赤い瞳を映した

「たとえばこういうのは「俺には」できない」

「え？」

犀川の声が切れるのと同時に俺はナイフと自分の距離を縮めた

そう、俺は自分からはどうしても死ぬ事が出来ない

「これは多分十人が十人そうなんだろうけどな」

「その・・・一人ひとりに違う能力が備わってるって事ですか？」

「ああ、簡単に言えばそうなる」

コイキなら声を多種多様に使い分ける事が出来るし、

トウドウなら仕草や読心術で人の心を読む事が出来る

ララとルルには医療術が備わっていてどんな怪我でも病気でも治す事が出来るし

ユウミはどんな動物の言葉も解る

サイは一度見た物ならなんでも復元できる

カエデは約一キロ先まで物を見る事が出来て

リヨウナは物事を絶対に忘れることがない

「俺は身体的能力が他の九人より抜きでてることくらいで他にはなにもない」

ただ、

「ただ、何なんですか？」

「ヨリの場合が違ってが違う」

「？、どういう意味ですか？」

「あいつは、」

そう、あいつには

「人の心そのものが聞こえるんだ」

「え？」

いや、感情が入ってくると言っただ方が正しかっただろうか

ヨリには他人の心の中に土足で入る事が出来る

まるで他人の部屋を勝手に開ける事ができるように

「意識しなくても分かるってことですか、それは・・・」

犀川の声が小さく聴こえたのは俺の気のせいなのだろうか

俺は自分の手にあるナイフをシオルダーにしまった

「ああ、意識とかに関係なく勝手に他人が思ってる事がそのまま耳に入ってくる」

嫌だと言って耳を塞ごうが関係なく

それがヨリを蝕んでもしらずに

人の思いはあいつの耳に流れ込む

「今ヨリは堤 大輔の心の中に入ってる。目的はどうして今回の資料を持ち出したのかを探るためだ」

そういつてさっき探し出した資料を犀川の方へ放り投げた

そんなもの持ちだすなんて誰に吹き込まれたんだか
俺はもう一度堤を見た

目の前に気を失っている堤大輔があの状態になってからもうどの
くらい時間が経ったんだろう

「なあ、ヨリ」

小声で隣で眠るヨリの頬にそっと触れた

あたたかいのは俺達が「人」で在る証拠だと思ってても良いのだろ
うか

ヨリ、お前は今どんな顔してあいつの扉しじふを開けたんだ？

心臓が軋んだのは多分気のせいだ

俺は自分にそう言い聞かせて犀川にここまで車をまわすように言
った

慌てたような「はい！」という返事が遠くの方で聴こえた気がした

ドアの向こう側 君の在る世界

空気が澄んでる気がする

いつもより身体が軽い気がする

どこかで声が聴こえた気がする

真っ暗闇のなかで僕の目の前には規則正しく整えてあるドアがあった

遠く

何処までも遠く霞んでしまいそうに消え入ってしまう気がするくせに

余程近くにその存在を感じる事が出来た

僕は今、土足で他人の心臓に踏み込もうとしてるのか

考えるだけで頭が痛くなりそうになる

それでも僕の身体は前へと進む

前へ前へ

少しずつ、一歩ずつ

踏み込む重さも浅さも自分がどれだけ浅はかなのかも知ってるつもりだったのに

此処に来て、どうしてか心音が高まった

怖いのか恐ろしいのか

自分は決めたんじゃない無かったのか？

此処へ来る前に、セイジに「うん」と頷いたのは何処の誰だった？

自分自身の存在価値は？証明は？理由は？

なあ、全てはこの時の一瞬だろ？

僕の中のもう一人の僕がそう言って歪に笑った

「そのくらい、分かってるよ」
そう言って切り捨ててしまつのは簡単なくせにどうしてか足が震える

ドクンッ ドクンッ ドクンッ

高鳴っていく脈に合わせて震える手に力がこもる
痛いくらいにドアノブを強く握った

ギイ――

古臭いような音がして、ドアが開いた

ああ、居た

ドアの向こうに居たのは僕よりも背の低い少年だった

水の音のような籠ったような空気の中に少年は独り佇んでいた
どこまでも暗い色を映した瞳には生気がなく僕の方を真っ直ぐに
向いてるくせに僕は彼の瞳に映らない

「こんにちは」

こんにちは、心の中の堤ターゲット 大輔

僕がそう言って微笑みかけたとき、薄らと少年の頬に赤みが刺した
「ああ、こんにちは。はじめまして」

堤 大輔です、と礼儀正しく少年はおじぎをした

そう、彼自身が堤の本当の姿

外見は僕とたいして変わりもしない十代中頃、といった感じで髪
型も体型も人並み

声もそこまで低い訳じゃ無い

精神年齢はそこまで変わっていないということなのだろうか

それにそうでなかったら三条の瞳を盗んで資料を奪いだそうなんてこと考えないか

そんな理由で自分を納得させると、僕は少しだけ堤と距離を縮めて着ていた上着を一枚脱いだ

「僕は君がどうして資料を持ち出したのか知りにきたんだ」

「資料？」

「そう、君が持ち出していった資料のこと」

僕がそう言っていると少年は思い当たったように「ああ、」と声を漏した「知ってる、それ」

うんうん、としきりに何度も頷いては僕の方につこりと笑いかける

「丁度三日前にアンドロイドに頼んで資料を持ち出してもらったんだ」

悪いことをまるで良いことだと思っているかのような口調はどこかさっきのあの堤の表情とは程遠くかけ離れた不思議な世界の住人のように感じる

彼はそういいながら、自分の頭をくしゃくしゃと掻いた

「まあ結果的には赤蝶が来て失敗しちゃったわけだけど、後悔はしてないよ」

「・・・どうして？」

今出した自分の声がどうか震えていないで欲しい

乾いたようにかさつく喉の奥を何かがせき止めるように張り上げてくる

「どうしてって決まってるじゃないか」

少年は決まったように笑う

その表情がまたあまりにも綺麗な物だったから僕は一番そらした

い瞳をじつと見てしまっていた

どうしてそこまでして振り返らないのか

何が彼をそうさせるんだろう

どれが彼を引っ張って行くんだろう

「だってそれは自分が決めた事だし、それにそれ以外の方法をした
つてこの方法に勝るものなんて何一つなかったんだから」

「でも――」

君がした事は悪い事なんだよ

一国の国王から盗み出したんだよ、慌てるくらい大事なモノを
家族だっているでしょう？僕にはいないから判らないけど、
必要とされて求められてたんじゃないの？君は・・・

「でも・・・ねえ、違うの？僕の言ってる事って間違ってる？」

どうして僕は今こんなに大きな声をだして叫んでるんだろう堤に
向かって

どうして・・・

どうして彼はあんなに悲しそうな顔で笑うんだろう

「君の言うことは間違ってるよ、むしろ正しい」

綺麗に見えるよ、と堤は静かに言った

そして、くしゃくしゃに搔いた頭をすこし傾けてまた笑った

「だって俺のしたことは間違ってた。それはこれからもずっとかわ
らないし変わっちゃいけない事だって思う」

だってさ、それが世界^{リアル}だろ？

君の思ってる事は世間一般では正しかったってこと

でも俺の『正しい』はそこから外れてて、君とは違う方向を向い
てただけなんだよ

「こんな理屈で通ると思ひ込んでた俺が馬鹿だったんだ」

堤はもう何で濡れてるのかも解らない俺の頬を優しく拭き取った
「泣くなよ、君は正しいんだから」

「でもっどうしてっ」

「君には今俺の思ってる事全部話さなくても伝わってるんだろ？だから泣いてる、まだ俺が何も話してないのに全部わかつちやっただろ？俺がどうしてこんなことしたのか何で今俺がこんなことをしたのかを――」

伝わってくる、流れ込んでくる

色んな感情を一つの鍋に全部詰め込んでぐらぐら煮てるみたい泣き出したい

こんな鳴咽みたいじゃなくてもっとたくさん声を出して泣きたい叫びたい

狂ったように何もかも吐き出して洗い流したい

でもそんなこと出来ない

全部が全部この人が悪いわけじゃないのに理由なんていっぱいある

どうしてこんなことになっちゃったのか僕にだってわかる

この人は悪くない、全然悪くない

でも多分

この僕の考えは世間一般から外れてて、きつと『間違い』なんだ考えのまともらない舌つたらずな声が口の端からこぼれ落ちる

「堤、さん。僕は・・・僕は・・・」

言いかけたとき、急に「真っ暗」な床がガクンと崩れはじめた

「え？」

振り返ると、背中越しにあるドアが今にも閉じてしまいそうにギイギイと音を立てている

焦って堤の名前を呼ぼうとしたときに、声が耳に響いた

「ほら、もう時間がないみたいだよ」

そういつて、堤は僕の胸ポケットに何かをスルリと忍ばせた
「世界（せかい）についたら使ってみると良い」

君の考えた事がいつか世界に届くから

「え？堤さっ！？ちよつと！」

僕の返事も聞かないで、堤は背中をぐいぐい押してドアの向こう側へ押しやった

「ねえ、こんど来るときはちゃんと『本当』の格好できてよ」

笑いながら冗談のように堤はそういつてへらへら笑った

「へ？」

何を言われているのかわからなかった

そのまえにガタンツと僕の身体が宙に浮いた

待ってるよ、君のこと

それだけ

最後にそれだけ堤の声がしたと思ったら、僕はもう自分の部屋のベットの中だった

塗り潰されたページ

果ての中、僕の心音はゆっくり掌の脈を伝っては流れてる事を意識させた

帰ってきたのか

それとも帰らされたのか

トクトクと流れる僕の中の赤はジンと痺れるように熱く首筋を撫でた

いつの間に自分の部屋に帰ってきたのかすら覚えていなかった
どうして今僕はベットに横たえているのだろう

どうしてセイジはあんなに不機嫌そうにドアを叩いたんだろう
喉の奥が痛い

擦れるように出る声は自分でも痛々しくて出したくもなかった
ああ、どうして

どうやって僕は帰ってきたんだっけ？

言い方も言い訳の取り繕い方もわからなかった

ただ僕に言える事は仕事はまだ果たせてないってことだけ
やるべきことはまだ残ってる

僕にはまだ・・・

ピーピーピー――

ベットの横に置いてあるパソコンの画面がチカチカと点滅して、
新たな仕事

任務が入ってきた事を告げる

こんな時間に？

いや、それとも僕が起きるのが遅すぎたのだろうか

そんなことを考えながらゆっくりと起き上がって配線とコードを避けながら椅子へと腰掛けた

カタカタとキーボードを鳴らして任務画面へと移動する
そこには赤い蝶のマークで一つ、

三条からのメールが届いていることがはっきりと映しだされていた

今日の任務報告の事だろうか？

眠りこけてしまった僕は今回の任務の状況もターゲットの確保も説明できるような術はなかった

こうなるとセイジしかその役割をなせる人物はいないんだけど、
彼がこんな仕事を進んでやるとはとうてい思えない
さて、どうしたものか

そんなことを考えながら、ポチと蝶のマークを押した
そこには思った通り三条からの報告命令が写し出され、日時と時間、いつもの場所まで来るようにと記されている

頭を抱えるようにして肘をついても何も変わらない

僕は諦めて部屋のドアを開けることにした

あの頑固者に何か頼み事をするのは大分気が引けるけれど
開けたドアの向こう側からは明るい日の光が射し込んできた

「眠れたか？」

そんな不機嫌そうな声はドアを開けてリビングへ直行してから数秒後僕の耳に真っ直ぐに届いてきた

いや、仕事はしてきたよ？と言って、さりげなくセイジとは離れた席に腰を下ろした

見れば台所では犀川さんがなにか作っていたようで、僕が席に着くと「おはようございます」と挨拶している所だった

僕もそのあいさつを笑顔で返して、セイジに「別に仕事しないで眠りこけてるだけじゃなかったんだよ？」ともう一度弁解した
だつてあのままじゃ僕は堤の心には入ってなかったみたいで

何の仕事もしないでただ逃げてたみたいじゃないか

内心では逃げ出したいと考えていた僕を丸め込みながら頬杖を付く
途端、ずかずかとセイジが近づいてきて頭を拳で殴られた

「——ったい！」

泣きそう、いや涙が出る

というかもう出てる

「そういうこと言おうとしてるんじゃないんだけど」

じゃあどんなつもりでそんな硬い君の拳で僕の頭殴ったのか言つてくれよ三木星爾め

と思つたとき、セイジの心の声が

不謹慎にも薄らと聴こえてしまったその声に耳を澄ませてしまった

『あんな貧弱なボディーガードがいなかったら今此処で言つてやれるのに』

途端僕の頭の上から「チツ」という舌打ちの音が

はて、「貧弱なボディーガード」とは誰のことか？

それは僕の視線の先、台所の方にある独りの女性のことだろう

僕が自分の頭をさすりながらセイジを見上げると、セイジはすくと僕の前座った

「なあ、ヨリ」

「……ちよつと待つて」

「は？」

「いいから待つて、すぐに済むから」

もごもごまだ何か言いたそうなセイジを押さえ込んで僕は台所

の方に向き直ってガラガラ鳴る喉の奥を思い切り開いた

そうとうひどい声がでたことに吃驚したけど、気にも留めてないような顔を無理につくって声を張り上げた

「犀川さん、一番下のフロアまで行って今日の任務確認してきてもらえますか？」

「は？」

セイジから素っ頓狂な声が聞こえてるけど気にしない気にしない台所からひよっこりと顔を出す犀川さんは満面の笑みで答えてくれた

「はい、わかりました」

ご飯はできてるので勝手に食べてもらって大丈夫ですよ、と僕に行ってから玄関の方に向かっていく

後ろの方でパタンとドアの閉まる音がしてからセイジが口を開いた飽きたようなないじけたようなはたまたその声はなにを意図していたのか大分暗めだった

思い当たる節が無いとでも言うように僕はそっぽをむいた

「ヨリ、お前性格悪すぎるぞ」

俺の心読んだだろと凶星を刺された

「『聴こえた』の、別に故意に覗いた訳じゃないしそんな気持ちを垂れ流してるセイジが悪いんじゃないか」

そういつて、手短に在ったコーヒーに手を伸ばしてミルクと砂糖をこれでもかと注ぎ込んだ

「あつそれ俺のっ！」

「知らないよそんなこと。で、話したいことって何？」

自分でも意地悪な顔をしていると自覚できるくらいに笑みを堪える事ができなかった

はあ、というセイジのため息ですらもコーヒーと一緒に喉の奥に流し込んだ

すると、セイジの口が開いた

「堤が何の資料を持ち出したのか聞き出したか？」

「え？」

僕は最初言われた意味が解らなくてぽかんと口を開けてしまっていた

持ち出した資料の内容？そんなこと任務事項に無かったと思うけどとおもって口を開きかけたその時、セイジが付け加えるように言った

「たしかに任務事項にはなかったけど、俺が堤から資料を奪還した時に少し可笑しな部分があったんだ」

「どんな？」

そもそも可笑しいところなんてあるのだろうか

なんて想いながら頬杖をつく

眉間に皺を寄せるセイジの顔が意外にも面白くって笑い出しそうになるのをこらえた

「黒く塗り潰されたページが幾つか在った」

「塗り潰してあるページ？」

「ああ、枚数的には気にするような物じゃないけどな」

「でもなんで「内容」のことなの？読めば解るじゃないか」

セイジは僕より頭がいいんだし、そういうことだって解るんじゃないの？というと、またはあとため息をつかれた

「それはこっちの台詞だ馬鹿野郎。大体何処の世界にメールで確認できる任務内容を態々あいつに行かせるやつがいるんだよ」

俺にはそんなこと考えもつかなかったとかなんとかいいながらセイジは腕を組んだ

「まあ要するにだ、俺がただ気になっただけだから別にいいんだけど」

そう、と短く言うとセイジは今夜の報告には参加するようにと厳

しく言った

わかった、と言った途端に後ろの方でガチャッとドアの開く音がした

「今戻りました」

「ああ、スイマセンご苦労様でした」

「今日の任務は3・Bの教室へ行く事と、今日中に昨日の任務報告をすることだそうですけど、あの……」

「はい？なんですか、犀川さん」

不思議そうに戸惑う彼女に僕はそつと微笑みかけた

でもその前に彼女の思っていることが全て見えてしまったので思わず笑い転げてしまった

「どうして教室にいくんですかってことですか？」

「え？あ、はいそうなんですけど」

僕がどうして先に思ってたことを言い当てたのか心底不思議そうだったけれど犀川さんはなんとなく精一杯の笑みでかえしたくれた
「それは僕達は世間一般で言う善良な中学生でいなければいけないからです」

そう、年をとらない僕らはいつまでもいつまでもこのままだから

「まあそんなことはいいじゃないですか、ご飯でも食べましょうよ僕達学校に遅れちゃうんで」

「あ、そうですね。すぐに支度します」

犀川さんがそついい終えたときに不意にセイジの声が耳元で聞こえた

いや、わざと犀川さんに聴こえないように僕の耳元で囁いた

「お前ほんといい性格してるよ」

「……ありがとう」

そつ言つて僕はコーヒーを飲み干した

作る創る作る　世界は創作の上に成り立つ

ひんやりとした廊下のフローリングの板をつかつかと軽い足取りで一人

いや、一台は進んで行く

「こまりましたわあ」

なんて言いながら歩きつつ、すれ違いざまに挨拶をかわしてはにこやかな笑みを見せる

でも彼————アンドロイドの『カナメ』には心音も

吐息ひとつですら感じられない

あの赤みが差す頬にさえも現実味が無くふわふわと空気中を漂っているように錯覚してしまう

つかつかと革靴の磨り減るような音がする

長い廊下を一頻り歩いて、鉛色の箱、ボタンが見えた

人さし指をそつとのばした

あと数ミリと思ったところで途端カチャリと音を立てて不可思議な箱が開いた

少しだけ瞳を丸くするが、「なんだ」という冷めたような表情にかわる

まだボタンもおし終えてないのに、という彼の電子回路のうみそが出した信号は瞬く間に

聞きなれない汚いアナウンスの声にかき消された

『カナメ様、第十八番で犀川様からお電話を承っておりますがいかがいたしますか？』

犀川……

名前を聞いた瞬間、カナメには一人の女性の姿が映像になって写し出された

ああ、と納得するような声が口の端から漏れだした

犀川、さいかわ やゆ

三条 聰太郎の妹を軸につくられたアンドロイドの名前
僅か十七歳でこの世を去った也由の死を受け入れられなかった聰
太郎が肉体に機械を組み込み、作り上げたアンドロイドの名前

彼女は最早「人」ではないのだ

自分と同じ時間軸で動くヒトガタがいるのかと思うとカナメ自身
複雑な気分になった

たしかに自分達は作られた存在なのだ。人の手で

それがどうしたアンドロイドなのだから当たり前だろうと言って
しまえばそれまでのんだけど、こうして自分で考えられるように
も作られていると思うとなると残酷なことか

この身体には自分で思考判断できるようにインストールされてい
るし

感情は在る、存在していて、だから三条にも使えようと思った。

けれど仮にそれが本当に自分自身の意思だったとしても初めからそ
う仕組みれていたことだとしたら？

決められていたら？自分の考えとは別に操られているのだとした
ら？

裏切られるとしたら——誰に？

この身体に？機械に？データに？聰太郎に？

まるで現実から目を背けたいという子供のように自分の妹を創り
直した

生き返らせようとした彼には、この思いを理解できるのだろうか

人に似て、人でなく、ヒトガタをした機械なら

この存在をどう肯定すれば『個人』という感情が認められるだろ
うか

いつ彼はあの重たい口を開くときがくるのだろう

この事実を知らない彼女のために——也由はいつ自分の

道がはつきり見える時が来るのだろう。もう約十年あの身体のまま
で疑問なんて持たないはずなのに

もし彼女がそのことに全く疑問をもたないでいるとすれば

そう、もしかしたら

だとしてももうサイバーチルドレン、おそらくセイジには気付か
れていてもおかしくはないだろうに

と、思った所で、自分がそれらしい返事もせずにドアの前に突っ
立っているだけだと気が付いた

ああ、すいません、と苦笑いが顔に滲んだ

「つないでくれますか？僕の任務はそこまで行かないとだめなんです」
京都なまりが混じったような声はにつこり微笑んで冷めていた表
情を元に戻した

『では、お繋ぎ致します』

その刹那、箱に入ったカナメの後ろでガチャンツと音がして扉が
閉じた

途端、あのよく聞きなれたか細いような声が耳に凍みた

『——カナメ……さん、ですか？』

カナメは「僕の車まで」といってから壁によりりかかって呼び掛
けに応えた

「元気にしとりますかあ？」

「あ、はい私は」

少しだけ嬉しそうに声がした

少し息の乱れた犀川 也由だった

作る創る作る 世界は創作の上に成り立つ（後書き）

遅れてしまってもうしわけありません

遅くなりましたがあけましておめでとうございます

明け逝く年が良い年だったと言えますよう

今年もこんな雑で小説とは言いがたいですが、

こーんなへっぱこ啓至を宜しく願います

眠っていた日々の間に

息を切らしていた犀川也由が自分の携帯電話を取ったのはセイジに命令を受けてから直の事だった

それでも彼女には直にその場の状況についていけなかった

脳みそが危険だとなんども呟くくせに、どうしても三条の声が頭の中で木霊して

「頼んだぞ」

木霊して、邪魔をして動く事ができない

彼女はなかば戸惑いながら震える声を振り絞っていた

大丈夫ですか、どうしたんですか、と言うことが精一杯だった

目の前には眠るように倒れた小柄で華奢な少年ヨリと、真紅の瞳でこつちを睨む少年セイジ

その背後には何処をみているのかも解らない絶望に衝動が入り混じったような顔をして膝をついて宙を見上げているターゲットの男性、堤大輔が独りいるだけだった

床には五人の衰弱しきった戸息に誰のものか定かではない血痕の痕だけが生々しく残っていて、サイバーチルドレンこちら側の勝利が確実だということを示していた

そんな状況で車を回せと言われても、彼女にはどうしたらよいかという方法すら思いつかないでいた

手にした携帯電話にはどの連絡先も無く、伝手もなかった

さて、どうしたものかと思った時、彼女の頭の中に一筋の光のように番号が浮かび上がった

ゆっくり、それはカタチとなって文字となって彼女の中を巡った

思い出した

それは三条に使えているアンドロイドのICナンバーで、いつか

役に立つだろうと三条に記憶させられたものだった

たしかこの番号に繋がればなんとかなるだろうという話だった気がする

でもそんな番号がどうして今更になって思い出せたのかも彼女にはどうでもいいことで、何の心配もする必要も無かった

ただ自分の監視が甘かった所為で彼らをこんな危険な目に合わせてしまったのではないのかと自分のことをただ責めているだけだった
どうしてあんなに眠ってしまったていたのだろう

瞳を開けると、彼女は一人っきりでテントに取り残されて丁寧に毛布をかけられて眠っていたのだ

銃声がしたと思って山を駆け上れば屋敷の中からは叫び声に血痕の痕、この部屋に来るまでにはどうしようもないほどの血の真紅の絨毯が敷いてあって、階段を一気に駆け上がったところまでは覚えているし、震えも無かった

一体この少年達はどんな仕事をしていたのだろうか

思った途端に震えが走った

全身に電気が駆け抜けたような衝撃だった

衰弱しきった五人ほどの男達にはもう顔に赤みは無く、見るだけで吐き気がしそうなほど赤かった

血の色が瞳に映りそうな気がした

「おい、急げよ」

セイジの声で我に返った

そうだ、急がなければと自分自身に言い聞かせながらせかせかとダイヤルをプッシュした

繋がるまでのどうしようもない沈黙がもどかしくて犀川の焦りを掻き立てた

「——カナメさん……ですか？」

息が切れる、声が震えて思うように吐き出せない言葉が悔しかった
そんな犀川の呼びかけに、カナメは易々と応えた

「元気にしますかぁ？」

京都なまりがまじったような声の呼応に犀川の肩の力はすつと抜けて、不思議と震えは止まっていた

「あ、はい私は」

気持良いくらいに声が出た

「そうですか、それは好かった」

「あの、こちらまで車を用意していただきたいんですけど、」

「・・・セイジくんにかわっていただけますか？」

「、？あ、はいわかりました」

言われて、意味も分からないままに彼女はセイジの方へ向き直つて続けた

「あの、カナメさんが替わってほしいそうなんですけど・・・？」

「カナメ？」

セイジは機嫌が悪そうに返事をしたが、カナメという人物に覚えがないようで、少し首を傾げていたが、犀川の手から携帯電話をするりと取った

「はい、」

途端、彼の表情は堅くなったことに犀川也由は気付かなかった

生きる意味がもし誰かのためだとするならばなんて残酷なんだろう

ヨリが起きるまでの5時間の話

つまらない話

こんなことならあの女に頼むんじゃ無かったと

俺自身が後悔してた話

ム力ついて殴りたかった話

一度は捨てたかった話

つまらない話

どうしてあの受話器を取ったのかも今になってはわからない

「はい、」

自分でもあつさりするくらい声が浮ついた

カナメ、という人物が一体誰だったのかすら思い出せないでいた
困惑して犀川から受け取った携帯電話はあいつがアンドロイドだ
っという確証もないけれど、血が通ってない機械の暖かみも無く

あの女の手の温度の欠片もなく冷えきっていて

横に居るヨリのあたたかさが身に凍みた

はぁ、と息をつこうとしたら途端息がつまるほどの声がした

「どうも、お元気ですか皇子」

「……………っ!」

「そう構えないで下さい、犀川に気が付かれでもしたらどうするん

ですか？横にはヨリくんもいるんですよね？」

京都なまりが混じったような話し方

そつだ、「カナメ」三条の元に居た使用人紛いのアンドロイド

たしか旧名は

「お前、工藤くどう 奏佑そうすけか？」

口からこぼれ落ちた言葉に受話器の向こうからは感嘆の吐息が漏れた

「覚えて下さっていたんですか皇子、光栄ですなあ」

いや幸運幸いとカナメは喜ぶ

でもそんなこと俺にとってはどうでもいい

今の言葉の切れ端を手繰り寄せて俺は叫びだしたい衝動を奥歯を噛み締める事で抑えようとした

声は生々しくも低くなつて凶星を指されていることを肯定してしまつ

もつと、もつと

俺に安静を頂戴、空気を頂戴このままじゃ

このままじゃ息が吸えない呼吸ができない

溺れて死んでしまいそう

「俺の事、そんな風に呼んでいいとも思ってるのかお前、仮にも三条家に使えてるアンドロイドだろ？」

震えないように手に力を込めるくせ、そのくせカナメの声は易々と弾むように聴こえる

「貴殿がその位のお方だということは存じておりますのでいくら人ではないといえ僕はそのようなお言葉を使う気にはなれませんねえ」
はははと笑うカナメの声が憎たらしい

望んだはずじゃ無いのに

望まれたはずでも無いのに

「皇子、お車で今から僕が直々にお迎えにあがります。お話はその時でも宜しいでしょうか」

刃物を首筋にでも突き立てられた感覚

死ぬ事はないのにあの一瞬の生々しい人間じゃ無い感覚

脳天を突き切らないと死なない俺達の

後が無い道を歩いていると実感する感覚

傷も残らなかつたてのひらを俺はもう一度見直した

ヨリを守つた証きずあとすら何も残らない

生きて行く上で逆らう事は許さない

「.....」

「皇子？」

「もし、」

そう、もしも

「もし断つたとするなら、お前ならどうする？」

もしもお前が俺ならどうしたい？

悲劇のヒロインすらともに演じられない俺だったならをどうし

たい？

逃げたい？泣き出したい？死にたい？

自分自身では死にきれないのにどうやって？

生きる意味がもしも誰かのためならばなんて残酷なんだろう

横で眠る小さくて暖かい体温は

偽者いつそなんかじゃないのに

俺の問いに軽い声が帰ってきた

「断つたとするならですか？」

カナメの声にひっそりと身構える

背筋に冷たく汗が滲んだ

「大切な物を奪つても、皇子とお話をしたいと願いますが。それで

すね、例えば……」

その横に居る小さな者とか

「……犀川とヨリを家に返してから任務報告に行く。その後でどうだ？」

カナメの笑顔が容易に想像できる

口惜しいくらいに綺麗な声が耳に響いた

「では少々お待ち下さい、もう少して伺いますから」

ピツという音がして、ぷつつりと電話が途切れた

はあと無意識に息が漏れる

近くに居た犀川が少し驚いたようにこっちを見た

「セイジさん？　どうかなさったんですか？　顔が真っ青ですよ」

気が付けば血の気が引いているような気がしないでも無い

少し間を置いてから口を開いた

「別に、そんなことないだろ」

生きる意味がもし誰かのためだとするならばなんて残酷なんだろう
どうして残酷なんだろう

横で眠る小さくてあたたかい体温は

偽者じゃ無いのに

本当じゃ無いのに

でも人で在って欲しいと思う願う

人間だと想うその暖かい小さい塊は

息をして此処に在る

溜息をつきたくて肩を落とした

血の気が引いたのは気のせいだと言い聞かせている自分が居ることには随分前から気がついていて

出会い 出逢い 出遭い

軽い音で鉛の箱の中でぷつつりと切れる音がした

『カナメ様、もう少々でお車まで着きますが』

汚いアナウンスの音が耳の奥に響く

「急いでくれますか？何か急用みたいで」

『はい』

沈黙の箱の中

カナメはスーツのポケットに手をつ突っ込んで昔の記憶を引っ張り出した

カナメが初めてセイジに出会ったのは今から約千年、

セイジがこの世に生まれてから二十年も経たない頃だった

その頃のセイジはまだ周囲の大人たちによって守られていた

「セイジくん、何がほしい？」

「いやあねえあなた、もうセイジくんも二十歳よ欲しい物なんて・・

・ねえ、セイジくん？」

「はあ、」

「なんでもいいんだぞ？」

「まあまあ」

キラキラと輝くシャンデリア

テーブルには豪華な食事に沢山の客人

片手にはグラス

中身は多分酒の類でも入っているんだろう

その中央にセイジは居た

薬を服用し始めて四年そこそこ

いつ異常反応が起こるかもわからない不安にどうしていいのかわからない孤独感、彼は大人たちの波へと押しやっていった

まだ生まれたての小鹿にちかい彼の瞳は赤く純粋な色をしていたのをカナメは良く覚えていた

三木 星爾という数字ではない番号が与えられたのは薬を服用してから三年後のことだった

サイバーチルドレンはそれぞれ貰い手のついた子供はその家庭へと送り込まれた

それはただ裏で大人たちがどれだけ子供達の性能が良いのかを調べているだけだったのだけれど、そんなことをその頃のセイジは知るわけもなく、ただ日々を平穩に過ごしていた

ベットに固定されて生きていた一年間に比べれば調査を受けている間は天国だと言えるのかもしれない

その頃のカナメは部屋の隅でただグラスを持っているだけのマネキンでもできるような仕事をプログラムされているだけでそのころのカナメには感情も思考能力もない

今考えればそれは滑稽かもしれないが、その時代ではロボットが歩いて踊ることで高い評価を得たのだ。そんな時に千年後と同じ性能のアンドロイドが出来ていたならばどれほど技術が発達していただろうか

その頃のカナメは人の形もしておらず、ただレンズに映る情報を記憶してグラスを配るだけの機械に過ぎなかった

だからこそ記憶力だけは確かだったのだろうが、思えば千年も昔の事を覚えている自分のことが気味が悪くなりそうな気がしてならない。そう思えるのも自分の体が日々作り変えられた結果なのだろうとカナメは考えていた

カナメがただの機会同然だった時、その時セイジの環境は他のサイバーチルドレンとは少し違っていた

いや、多いに違っていると言った方が正しいのかもしれない

セイジの出生だけには三条 蘭太郎とその妻が関わっていたのだ
った

蘭太郎は実験の三年前に実の息子を亡くしていた
考えれば、甦らせようとする三条 聰太郎の考え方はここからき
ているのかもしれない

蘭太郎はサイバーチルドレンを創る際にクローンをつくろうと試
みた

実の息子そっくりのクローンをつくろうと考えたのだ

結果、運良くそれはカタチとなつてすくすくと育ち今に至つた
それがのちにNO.0の『赤蝶』—— 三木 星爾となる
その容姿、考え方

全ては蘭太郎のためだけに
でもそこで問題が起こってしまう

肝心の星爾は全く、欠片も蘭太郎のことを記憶していない
当たり前と切り捨ててしまえばそれは当たり前かもしれないが、
蘭太郎にとっては大問題だった

実験が成功しなかったのではないか、栄養剤の成分がおかしかつ
たのではないか

考えようにも何も出てこない不安と本当に自分の子供なのかとい
う不信感から蘭太郎はセイジを養子に出した

頭もよく、聞き分けの良かったセイジは直に祖父と祖母に引き取
られる

大金と引き換えに

人以上になんでもこなせてしまう

それは逆に恐れられる対象にもなる

祖父と祖母はそれを恐れ、まるで腫れ物にでも触るようにセイジ
に接した

それをセイジもわかっていた

そして溜め込んでいたのだった

その糸がぷつんと弾けたのが二十歳の誕生日だった

二十歳と言ってもその姿はまだ小学生になりたての幼い顔つきで、あまりにも年齢とかけ離れた幼い声は透き通っていて、純粹だったサイバーチルドレンは百年に一年分の年をとることすらまだそのころはわかっていなかったため、セイジはその幼さで成人を迎えたのだ

だが脳は人の三倍の早さで成長していて、身体能力はすでに常人を超越していた

まさに兵器に近いものがあつた

汚れない幼い声が

ただ真っ直ぐだった

「俺、あれが欲しいんですけど」

唐突に開いた口からはそんな言葉が飛び出した

周囲の大人は何が欲しいのかとセイジの小さな指のさす方向へと瞳の視線を走らせた

「セイジくん、あんな物でいいのかい？もつと我俣を言ってもいいんだよ」

「そうよ、何もあれじゃなくても」

別に気を使わなくてもいいのにという声がするが、セイジは真っ直ぐに応えた

「いえ、少し勉強したいことがあります」

そんなこと何も無いということくらいその場にいた全員がわかってはいたが、それをあえて口にする大人はいなかった

セイジの指の先

その先には一台の機械が客人にグラスを配っているところだった

寂しくて哀しくて

でもそれは酷くくだらないことだと思っていた

弱い証拠なのだ決め付けていて

そんなことを考えてはいけなことなんだってずっとずっと
思っていたのに

欲した

自分自身で対の存在でもなくせに

人でもなくせに

ずっとずっと何処か心の中で叫び続けてた

考える思考すら在って無いような気がしていたのに

君のこと考えるといつでも苦しくなるくせに

守った証も残せない

想い出にすら居られない

寂しくて寂しくて

求める事は酷くくだらない事なんだと

ずっとずっと思っていた

あれが欲しい

なんてそんな言葉が自分の口から出たことに驚きが隠せなかった
何でも良かった

無理強いされるならその辺の手頃なものでよかった

なのに、自分の指差す方向があんな場所だったなんて

あれがほしいと言った自分は確かに本当だった

望んだことが自分自身で人らしく感じたなんてそんなことあって
はいけないと強く

強く思った

ひどくそれは哀しいことで、そう想うことは
思うことはまた人間のようで

人型をした兵器のくせに人間のように
自分が酷く幼く感じて吐き気がしたんだっ

セイジは適当に人払いを済ませて、自室についた
部屋の中には露骨に大きいグラスをプレートにグラスをのせた口
ボットが置いてあってセイジのほうに人間で言う瞳のカメラを向け
て、チカチカとランプを点滅させている

おそらく人を感じるようになっているんだろう
はあ、というため息が勝手にセイジの口からこぼれおちて、独り
の肩をがくつと落とした

人混みに決まったような挨拶、化け物でも見るような眼に痛いく
らいの視線

すべてが暗く陰を落としてセイジの顔を強張らせた
生きてきた二十年間がほんの一息のようなその幼い顔つきからは
彼が今日二十歳になったことすら嘘のように感じられる

小さなてのひらにはしっかりと分厚い本が握られていた

「誰にでもわかる配線の仕方」

セイジの小さな口から甲高い声が漏れて、本の題名をそのまま声
でなぞる

何でも良かったなんてそんなこと本当はなかった

これがよくて

コレがよくて

ほしかったんだずっと

創りたかったんだずっと昔から

「俺がお前の世界を変えてやるから」

セイジは握り締めたドライバーをロボットのネジへと押し当てた

カード

セイジは『カナメ』というアンドロイドを二年以上かけて創り上げた

人の形をした、人でなく、人に近く、人型の機械を
自分自身にもっとも近い存在を自分の手で創った
基になったのはその当時最新だった一つのロボット
機能がグラスを他人に渡す事しかできない嫌に大きくて扱いづら
いものだった

セイジはアンドロイドの彼——カナメに命を吹き込んだ
年が経っていくごとに、カナメをどんどん進化させていった
自分に近い存在で在ってほしくて、カナメを人間ではない人型に
とどめる事がしたくて

終に人の言葉を理解し、話し、自分の考えを伝えて、自分自身の
身の回りの事は全てできるほどのアンドロイドへと成長させた

それは彼の幼さからなのかそれとも怯えからなのか
恐怖が彼を掻き立てたのか
カナメはそうしてセイジの手でこの世に生まれた
人ではない人間が人ではない人型を作ったのだった

あの時、

千年前のあの時、僕は皇子を守ると決めたんだ　たとえどんなに
残酷で、悲惨で

それが間違いであつても

——どんなやり方をしてでも『守る』と

三条に皇子が壊されるくらいなら僕の手で握り潰す

あの手のひらで作られた瞬間を今でも忘れてはいないのだから車の中、カナメはハンドルを握ってアクセルに足を乗せ夜の山道を登っているところだった

険しくなる山道も新型の車にしてみればただのハードルにもならない

あつという間に街の明かりは遠ざかっていく

「僕はいつから皇子に捨てられたんでしょうかねえ……」

呟く声は寂しがっているのか、それとも哀しいのかわからない

カナメが今の状態にまで完成したのはカナメが生まれてから五年後のセイジが二十五歳になった時だった

その時はまだ蘭太郎が健在していて、セイジたち十人を密かに集め大国との交渉に乗り出そうとしているときだった

その時にカナメは三条家に売り渡されたのだ

自分は彼に必要とされていなかったのだと、捨てられたのだと強く自分を責めた

突然居なくなるならどうして……

どうして僕をあんな風に切り捨てたのですか？

カナメは今でもそれが気持ちの隅に残っていて、しこりのように感じていた

機械が想うなんて感情を持っていること事態可笑しな話だ

笑い飛ばしてしまいたい———そう思う事さえも創られた

感情なのかと思うと、泣きたくても流せない涙が悔しかった

人間に生まれてきたかったわけじゃない、セイジに捨てられたことが悔しかった訳じゃない

でもそれでも、一つの生き物として存在できない自分が悔しい気がした

なんとなく、といった方が彼にとっては正しい解釈なのかもしれない

それでもセイジは話してくれると言ったのだ

少し卑怯なやり方かもしれない
それでも、望むままに生きていたって
壊れるまで動き続けたっていいじゃないか
カナメは思い切りアクセルを踏みつけた

虫の息だった男たちの戸息も聞こえなくなったところに、エンジン音とは少し違う電気で動くタイヤと機械の動く音がした

着たのか、

セイジは横で眠るヨリを背中にかつぐと、犀川の方を向いた

「来た、いくぞ」

「・・・？はい？」

犀川には聴こえなかったのか、それとも誰がここに到着したのか少し驚いたような、キョトンとした顔つきでこっちを見ている
今一解ってないらしい

「『カナメ』だよ、お前が呼んだんだろ」

覚えておけよそのくらいとセイジが言くと、犀川は「ああ」というように納得してから頷いた

「でも少し早すぎませんか？もう少し時間がかかってもいいと思うんですけど」

「解りきつたこと聞くなよ」

「え？」

「あいつはアンドロイドだぜ、」

俺達と似たり寄つたりの人工物

人でありながら人でなく、人間として存在する人型の存在
存在理由は昔俺が奪ってしまった

—— あいつに間違いもズレもないだろ

俺がその言葉を口にしようとした時、後ろの方、酷く優しそうな
声がした

「——そないなことないですよ？」

京都なまりがまじったような垢抜けてひょうきんなその声はニヤリと笑いながらドアに寄りかかって腕組みをしていた

「ああ、カナメさん、お忙しい中わざわざありがとうございます！」
犀川がカナメを見るなり一礼して挨拶をする

すると、カナメはいつものような顔つきでははと笑った

「いやあ、由さん、お久しぶりですお元気そうですねによりですわ」

一つ息を置いてヨリを担ぐ左手を空けて、シオルダーに手をかけた
じんわりとした汗が手のひらを伝う

俺はカナメと向き合うのが怖いのと、ヨリをここからすぐに引き離してしまいたいのとで苛立ちに似た不安感が自分の体を支配していることに気が付いた

「早くしろよ、こっちはまだ任務中なんだ」

焦りからきた声が震えそうになる

力任せに言った言葉は何の力も無い声に返される

「ああ、すいません」

それにしてもセイジくん、派手にやりましたね今回も、といらいない付け加えをしながらカナメは堤に手錠をかけて額の十字をハンカチで拭って消し去った

念入りに堤の心臓に手を当ててから手首の脈をはかる

死んでいないことを確かめているようだ

一頻り調べ終わった後

「では行きましょうか」

そう言つて堤を背中に担ぎ、俺達の前を歩き出す

『ターゲットは生きたまま確保』

俺は任務前ヨリが言っていた言葉を思い出した
どうやら俺達の任務情報は既にあいつの頭の中に刻み込まれているようだ

誘導されている間中、俺はまるで監視でもされているような気分だった

カナメの後を何の疑いもなく歩く犀川にではなくそのまえを自分よりも幾分も大きな堤を担いで優々と歩く

檻の中で生き永らえている動物のようだと自分自身を呪ってしまいたかった

出来るなら今、俺の頭を打ち抜いてくれ

そう思った

「では皆さんお乗りください、僕が運転しますんで」

屋敷を出て直目の前にカナメの車が止まっている

カナメは担いでいた堤を後ろのトランクを開け放って投げ入れたそしてボタン、とそれを閉めると後部座席のほうへと犀川を勧め、俺に向かつて助手席のドアを開けた

「矢木那さんは後ろにお願いします、セイジくんはこっちに乗ってください」

「・・・・・・解ってる」

俺は気が進まなかったけれどヨリを犀川の横に降ろしてドアを閉め、助手席に乗り込んだ

カナメはそれを見計らったように運転席に乗り込んで、ハンドルを握る

「さて行きますか、」

というカナメの声に犀川が「宜しく願います」という声が耳に残って離れない

うんざりするような窓の外は瞬きをすれば消え去ってしまいそうなほどに目まぐるしく景色が変わる

息をつけば、街の明かりが薄つすらとカナメの目線の先に見え隠れして直に三条の元へ連れ去られることを笑っているようにも思えたその時、カナメが口を開いた

「犀川さん」

「はい？」

「僕とセイジくんは三条さんのところまで任務報告に行きますから、犀川さんは矢木那さんと一緒にセイジくんの家まで戻ってくれませ

んか」

「はあ、それはいいですけどあたしはそんなボディーガードと言ってもセイジさんたちのお宅までお伺いするわけには……」

犀川の顔が瞬時に曇る

それもそうか、と俺は納得した

犀川はアンドロイドどうやって三条のところに居るのかは知らないが俺達をどこまで監視するのかまでは教えられていない

それにこの女にはまだ隠されている秘密があるし、まだこいつがアンドロイドだと特定できている訳じゃない

俺の家にヨリと二人で置いて行くには不安要素が多すぎる――

でも今はカナメの方が先決だ

俺は後から追ってくる暗闇を両手で掃ってからジャケットのポケットに手をつ込んで手探りで鍵を探し当てた

そしてそれを後部座席のほうへと投げた

「わっ！」

犀川がそれを慌てて拾い上げる

「セイジさつ？これ……っ？」

「それで勝手に入れ、ヨリはそいつの部屋で寝かせとけそれ以外は何もするなよ」

何も触るなと釘を刺した

その時のカナメの顔を見れない自分が憎らしかった

きつと笑っているんだろうなと心の隅で誰かが囁くのが聴こえた気がした

牢獄 一瞬 永遠 綺麗と呼べる光は何か

無音に等しい車内の中には、鼻歌を歌うカナメの声がただ響いているだけだった

ついさっき、犀川とヨリを中央改札エントランスの前に降ろしてきた所だった

犀川にカナメが

『今月分のお給料です、三条さんが渡すようにって僕に』

そういつて犀川に白い封筒を手渡していたが、俺はヨリを犀川に任せる事しかできなかった

ただ助手席から担がれるままになっているヨリを見ることしかできなかった

赤蝶とまで謳われたサイバーチルドレンのくせに

兵器のくせに情けない

人間ではないアンドロイド相手にとまどってるだなんてこと考えるたびにおかしくなって笑いそうになる

不意にため息をつきなくなる

思い切り深く肩を落としてめいっばい誰の事も気にせずに――

そう思った時、唐突にカナメの口が開いた

「皇子、こうして二人で一緒にいるのはいつぶりなんでしょうね」

嬉しそうに口の端の方が曲がっている

にこやかな笑みが心臓のほう奥深く突き刺さった

「この間お会いした時は皇子がまだ小さかったのに今ではもう僕と同じくらいの背になって……いやぁ大きくなるのは早いですねえ」

やめろ、止めろ、止めてくれ

心の中で俺が叫ぶ

きつとカナメには解らない何処かの彼方で叫んでる

それでもあいつは止めずに話し続ける

まるで俺を許さないとしても言うように何度も何度も何度も
「もう少して千年弱ですか、三条さんのところにお使えになれる
のも」

「……まあな」

「長くなりますねえ」

眼を細めて笑うカナメの笑顔が耐えられなかった

やめてくれ、そんな顔で言うのは止めてくれ

自分の手で作り上げた存在に、物に怯えるなんて——どう
して俺は感情が入った人型をつくったんだろう？

今更自分自身昔のことを後悔するなんて思っても見なかったのに、
カナメの言葉はこうも容易く俺の心に突き刺さる

窓の外を高速で追い越していく景色の中は嫌に綺麗で笑い出した
くなる

笑い飛ばしてしまいたくなる

昔の自分を笑い飛ばしたかった

容易く、カナメを作ったのは今からどのくらい昔の事なんだろう
考えると頭がおかしくなるくらい昔のこと

そのころはまだ自分のことを人間であるとはっきり言えたのだろ
うか？

蘭太郎の死後完成したカナメは初めての俺の友であり、たった一
人の家族だった

生き過ぎた俺達には一年という時間なんてあつという間に過ぎ去

っ
てしまっ

瞬きをしている間に人々は老いて死んでいく

俺達を研究していた科学者達も、三条家も、任務として通っていた中学の生徒も皆俺達とは違う時間軸で生きていた

それがうらやましかった

一瞬を生き抜いていくあの笑顔に恋焦がれた

でもその輪の中に入りたくても入れない

友達を作っても、老いない、傷もつかない俺の身体を見れば居なくなっていくし、死んでいく

一生このまま独りで生きていくのかと途方にくれた日々もあった皇族の血で創られ、養子として招き入れられた苦痛の日々になんの面白みもなくただ淡々と日常をすごしていた

死んでる奴と変わらなかった

人間になりたかった

ただそれだけのことなのに、それは酷く難しくて困難だった

俺には無理なんだって事が絶対的な力で見せ付けられる

だからせめて独りにならないようにと自分の手で創ったんだ

アンドロイドを

寂しさからなのか、哀しさからなのか

人間ではない、ただの話し相手を欲しがった自分を二十歳の誕生日に受け取ったただのロボットをそんなものを紛らわすためだけに創っただなんてそんなこと滑稽で恥ずかしくってしょうがなかった

でも欲した 自分から

誰でもない俺自身が手を伸ばしたんだ

でもカナメが精巧な創り故に時々怖くなる時があった

本物の人間のようになっていくカナメが恐ろしく、それでいて無くてはならない存在になっ

て日々に大きくなっていくそれを俺はわかっていたのに

わかっていたのに俺はカナメを三条家に譲ってしまった

それも千年も昔に

カナメに痛がったりする性質は無い

けれどももう千年も経っている、三条家の科学者がもつとカナメを精巧に作り上げていたとしたら？

完璧なまでに人に近い仕草、容姿、考え方話し方

いつから俺の手を離れてもあいつは自分自身の力で歩いて行けるまでになつたんだろう

いつから俺はあいつを解らなかつたんだろう

人間のように見えるロボット

人間のように見える俺

でもカナメは涙も流せない、本当の心臓も頭脳も持っていない
単なるロボットの、アンドロイドの一体でしかない

いくら精巧でも、人に近い存在であつても

俺は涙も流せる、心臓もあつて頭脳もある

でも兵器に等しい

血を流そうが何をしようが脳を完全に消滅させるまで死ぬことはない

完璧なまでの治癒力

でも栄養剤を飲んでいないといつ人を殺してしまうか解らない
何年も生き続けて、遠い記憶が霞むまで

俺は本当に生きているのだろうか

半端モノの俺達はいつからちぐはぐだつたんだろう

どうして俺達はつくられたんだろう

どうして人間になりたいと思つたんだろう

どうして俺はカナメをつくつたんだろう

どうして俺達は人間じゃないんだろう

どうして話相手を欲したの？

人間のように人間ではなくて、人型のくせに

欲した事は間違つてるの？それとも正しい？

決める基準もなにもなくて、ただ彷徨つてるだけ

窓の外、消え行く景色の彼方では誰かが生まれて死んでゆく

俺達はいつ終わりを迎えられるんだろう

いつ三条に利用されなくなるんだろう

いつ死ねるんだろう

「そんなこと言わないでよ、セイジ」

ヨリの声が遠くでする気がする

そんな声で俺の名前を呼ぶなよ、生きてる気がするだろ？

こんな力タチで生き永らえてるくせに

牢獄に閉じ込められて、一生出れないほつがまだ希望の光がある

気がする

一瞬のほつが永遠よりも綺麗なんだろ？

いつ俺達は綺麗になれるんだろう

想いかけたとき、カナメの声が耳の中に響いた

「皇子、もう着きますよ準備してくださいね」

「・・・・、ああ」

遅れる返事にクスリとカナメの笑い声がある

遠くの空の方で月が滲んで光っているのが見えた

少女 少年 ミセ

カツカツという靴の音が響くコンクリートに固められた路地裏がこんなにも殺風景だっただろうか

三条が居るビルはすぐ目の前に見えるが中に入るには鉛の箱を使わなければならない

車を降りた俺達は鉛の箱に立ち寄るため、きらびやかな夜の明かりの中、唯唯真つ直ぐに歩いていた

任務以外で三条のいる高いビル——俺達は「城」と呼んでいる——に行くためにはいくつかの規制や拘束まがいの面倒な柵がある

しかし、今はそんなことをしている時間が無い

任務報告の時間はきっかり真夜中の零時

今は丁度十一時を回った頃だ

三条の城の入り口である鉛の箱は規制や拘束をされない以外に外から乗ることは出来ない

もしそのイレギュラーな柵を背負って乗ることにでもなれば時刻は過ぎ、マイナスポイントどころか犀川に預けたヨリでさえもどうなるかわからない

奥歯を食いしばるようなことだけが頭の中に渦巻く

ナンバーズである俺達でさえも許されない

どれだけ用心深いかわからないが、とりあえずあの箱に乗り入れないことには三条のもとまで行くことができないということになる

大分歩いたところで、横のカナメが不思議そうに振り返った

「皇子、早くしないと検問が閉まりますよ」

「普段は絶対に使わないけどな……」

「はい？」

思った解答と違う答えが返って来たことに驚いたのかカナメの瞳は大きく見開かれている

「ここ、だよ」

戸惑うようなカナメの足音が後ろから追いついてくる

俺はカナメを引き連れて

一軒の この辺り一帯から妙に浮いている廃虚としか思えない「ミセ」に足を踏み入れた

大げさにドアについたベルがカランツと乾いた音を立てた

中に入ると、別世界のようなアンティークの家具に設えられた部屋と

一人の少女――

いや、少年がお茶を啜りながらぼつんと立っている

それだけ

ただそれだけ

少年の顔はにんまりとシニカルに笑って言った

「いらつしゃいませ、何色のお花をお探しですか？ 赤蝶さん」

綺麗なボーイソプラノの声にカナメはさっきよりも目を丸くして

俺を見た

こんな場所に一体何しに来たんですか？とその瞳は言っている

でも俺はそれを無視して続けた

「大分お久しぶりです、秋さん。こっちはカナメ、アンドロイドで今任務報告に行く所なんです」

手短かに説明しながら、俺はカナメのほうに手をやった

カナメは途端に少女のような美麗な少年―― 秋に向かって

頭を下げる

俺が三条以外に敬語を使うのが珍しかったのか、「初めまして、カナメといます」と言った京都なまりの声がいつもより震えてい

るように聴こえたのは気のせいだったのだろうか

秋は俺をもう一度見てから奥の部屋へ続く廊下を指差しながら笑った

「カナメちゃんはそのまま戻って検問とか受けてから正門を目指しなさいな。君なら軽い刑ですぐに行けるから」

「え？あの、セイジくんのほうは……？」

言いかけたカナメの声を秋は遮った

「行けよ、早く」

煌めいたその瞳から、俺もカナメも目を背けることができなかった
声色が変わったことが恐ろしかったのか、それとも魅入ってしまったことに気を取られ過ぎたのか

どちらでもないのは確かはずなのに 喉から声は出てこない
一瞬の凍り付いた沈黙の中、冷めたような空気に秋が持つティー
カップの中のお茶だけが

白い湯気を天井に注いでいる

俺は深く息を吐き出してから、秋のほうに背を向けた
じゃないと、そうでもない

自分の中の何かが溢れ出してきそうだったから

「カナメ、」

「はい 何でしょうか？」

「すぐ戻れ まだ正門なら間に合う」

「……」

黙り込むカナメは憂鬱そうに俺を見る

それでも次の瞬間にはその顔は瞬く間に笑顔へと切り替わった

「はい、ではお先に」

秋に向かって一礼するとカナメは今来たドアの向こうへと掻き消えた

跡形もなく気配が消えたところで 途端、秋は大声で笑い出す

「セージくんおもしろ〜いつ！何してんの？こんな昼気楼みたいな薬局屋に立ち寄りちゃってさ！ねえ今回はどの程度探した！？ねえねえ、探してくれたっ？」

子供のようなそのはしゃぐ声に少しだけムツとしたような気分になる

ただ、この人は三条よりも質^{たち}が悪い

「秋さんこそ、そう思うなら外の「ミテクレ」どうにかしないとダメなんじゃないですか？」

思ったよりも低く、機嫌の悪い声が出た

どうみたって廃虚にしか見えないじゃないか。大体、こんな場所で商売をしている事自体この時代ではありえないことだ

千年前に深刻化した温暖化現象で海面の上昇と共に多くの動物や人間の命の灯火が消えた

そのせいで俺達が開発されたわけだ

ただその実験は失敗、その上国自体を維持できるのかということころにまで追い込まれた

その時に世界が行った政策は『国の領地を高くすること』

他国の領地売却、亡命、埋め立ては当たり前

より海面よりも高く自分の領土が高ければ高いほどに安全になる
そして資源

高層ビルの上には木々が生え、道路という道路には鬱蒼と茂る草が車の行く手を阻む

高度な技術の進歩により少量の苗からでも大木まで育成することが
できる薬が開発された

もちろん実験台となったのはかつてまだ多くいた俺達の中の一人
どうせ能力の低い奴等から消されて逝ったんだろう

そうして今強いモノだけが生き残れるこの世界で俺達は呼吸をしている

三条は世界でも十本の指に入るほどの権力者だ

この国では良い人のような顔で政治活動に取り組んでいるように

見えるが、それはただのハリボテでしかない

裏では科学者達を操り、莫大な資産を握るただの黒幕だ
その裏にもきつと何人かの支援者がいるんだろうけれど

そんな中で今時「薬局」なんて商売をしている奴は多分秋くらい
なのだろう

今じゃ自宅にそのまま薬が届くし、医者は密集住居に一人と必ず
義務付けられている

——それはサイバーチルドレンがいつ壊れるかわからない
からなんだけれど

秋のミセは蜃気楼の如く出現し、風のように消えてしまう
『ここにミセがあるから僕が在るんじゃない　僕が在るからミセに
なるの』

だから僕が場所みせを選ぶ——と昔に言っていた気がした
見つけたすのは幸福シアワセの青い鳥を見つけたすのよりも難しい
じゃあなんで見つけたすことができたかって？

「ねえ、セージくん　見つけるの上手くなってきたねえ」

笑顔の秋の顔

見るからに嬉しそうだ

「だって秋さんはいつも草の茂ってない路地裏にミセを構えるでし
よう」

そうなると場所は限られてくる

それに秋はこの街以外にミセをつくらない

俺の声を聞いた途端、秋の顔は気の抜けたようにへらへらと笑った
「うん、僕さあーいう青々しい木って嫌いなんだよねえ」

そこまで言くと、秋は踵をかえして奥へ続く廊下を歩き出した

「ではお客様、奥のお部屋でお話を承ります」

「ありがとうございます」

俺は短く返事をする。秋のあとに続いた
どうして薬局屋に立ち寄ったのか。ってカナメなら聞いただろうな
なんてことを頭の隅で考える

いや、本当は薬局屋に用なんて何もないんだ

俺が用があつたのは――

秋が突き当たりのドアの前で立ち止まってドアノブに手をかけな
がらこつちを振り返った

「ではお客様、ようこそ『願望屋』へ」

笑顔の秋の瞳が一瞬 淡く煌めいた

少女 少年 ミセ（後書き）

大変遅くなってしまってもうしわけありませんでした
願望屋は友情出演です（笑）
セイジくんの今後に期待して下さいな

願望屋

『願望屋』

それは願いを叶える場所、またはその存在するところ
誰かの願いのために在り、誰かが願うからそれが在る
例えそれが叶わないものだとしても

誰かがそこで願うなら

どんな願いにだって応えましょう
今在る全ての世界をかけても
その願いがなによりも強いものならば

「それで、せーじくんは僕に用ってなんなわけ？」

唐突に、お茶を啜りながら秋は頼いっぱいにお菓子を頼張って一人がけのソファに寄り掛かった

「僕本当はそんなことのために此処に願望屋開いたんじゃないんだよ？今日は別のお客さまが予約してあるから早くして」

そう言いつつも俺に向かいのソファをすすめて、別のカップにお茶を注いだ

「実は今すぐに三条のところまで行きたいんです」

理由もなにも言いたくはない。ましてや、この人に俺が誰かのためにこんな『願望屋』を使うほど必死になるだなんて思われたいなかった

殺し屋で伝説にまでなった奴がこんなに怯えてるだなんてそんなこと

俺の手がカップまで伸びたその時、突然秋は自分が持っていた力ツプをカシャンツと机に置いた

「何、それ。僕に何も言わなければ解らないとでも思ったの？」

全て見通しているとしても言うように俺の目を真っ直ぐに見る

「何がですか？叶えられないとでも？」

背中には冷や汗が流れ出ているけれど、それを無視して俺は続けた
じゃないと自分が崩れ落ちてしまいそうな気がしたから

「何も言わないなんてなんのことですか？時間がないんです。早くしてください」

俺が畳み掛けようと口を開いたその時、秋は不意に目を剃らして窓の方を見た

「矢木那のことが大切ならそう言えればいいのに」

ぼつり、とそういった秋の顔は歪に笑っていた
楽しそうと呼ぶには寂しそうで、哀しそうと呼ぶには幸せそ
うな気がした

でも、どうして――

「どうしてあなたがそんな顔するんですか？」

聞き返した俺の声は目の前の人間に届いていたのだろうか

秋は何も言わずに立ち上がると、部屋の奥にあったドアをコンコンと手で叩く

ノックのような仕草をして、俺の方に向き直った

「僕にも昔に大事な人がいてね。でも、」

死んだの

哀しかったとか、寂しかったとかじゃなくて、受け入れられなかった

全部夢で、嘘で 目を開けたらいつもみたいに笑って僕を見てくれるって思うくらいに

でもそんなことはなくて、いくらかの季節が過ぎた頃
その人そっくりの子が僕のお客さんになったの

嬉しかった。その人じゃなくても、似た存在に出逢えたことが素直に

手放したくなくて、その子をここで働かせてたの

大切で、大切すぎて その人と重ねてみてるだけじゃ無かったんだ
もうその子が居ないと僕を保てないほど、僕にとってかけがえの無い存在だったの

でも、その子は僕みたいじゃないから

すぐに動かなくなっちゃったんだ

輪廻を信じてるわけじゃ無いけれど、いつかまたって思ってる僕がいて

抜け殻みたいに僕はまた今もこうして待ってるんだ

「誰かの願いを叶えるたびに、僕はきつと人でなくなったのかもしれないね」

そう言って、いつものように綺麗に微笑んだ

「秋、さん？」

「君は大事にするといいよ」

そこまで言い終えると、ノックしていた手を止めて扉を開いた

俺は、自分の目を疑った

「え？」

ドアの向こう側には三条の城の最上階の廊下があったのだ

此処は、秋と俺がいる願望屋は地面に在る

けれど、扉の向こうはいつも目にしている最上階の景色

廊下にある窓の向こうの景色がそれを明確なものへ変えて行く―

「秋さん、これは……」

戸惑いながらも声を出すと、秋が俺に向かって笑いかけていた
その笑顔が痛いほどどこかをグシャグシャと掻き乱していくのが
わかる

喉から出る声が詰まった

「使いなよ、せーじくん。これそんなにもたないんだよね」

そう言いながら俺の背を叩く

「対価は……そうだね、」

秋は突然耳元で囁いた

「ヨリちゃんをちゃんと守ってあげること、かな」

あの子はまだ『完全』じゃないんでしょ？

「わかりました。かならず」

そう言つて、俺は足をドアの向こうへ踏み出した

またね、という秋の声に振り返ると、もうそこに秋の姿はなく
ただの壁が在るだけだった

『願望屋』

それは願いが集う場所、またその終着駅

最期の願いを僕に託して 人々は何を得て、何を捨てるのだろうか

秋は何も無くなったドアの向こう側を見ながら、そつと呟いた

「ヨリを守るってことは、この先の未来に食い潰されるってことな
んだよ、せーじくん――」

それでも彼は言つた『かならず』と

彼の未来を捨ててでも何を願うのだろう

果てない答えの逝く末は僕も知らない

いつになれば

「どこまでいけば」

僕に終焉^{おわり}は来るのかな

溜息をついて、ゆっくりと

秋はドアを閉めた

招待状は配られた（前書き）

遅い更新ですいません（土下座）

時はもうすでにヨリが目覚めた所まで進んでおりますので、その点だけ考慮して下さい。

まあ、そんなこと考慮しなくても読めます
↑

招待状は配られた

唄うように、誰かに思いを伝える事は
きつと酷く難しいことなんだろう

すぐに愛する人を抱き締められたらどんなにいいだろう
好き放題にできたらどのくらい楽になれるだろう
今直ぐにこの時間を投げ出せたら、僕は何になれるのだろう

誰かの幸せを素直に喜ぶ事が出来ないのは
この世界で僕達だけだ

何かの不幸でしか何かに対して優劣を付けられないのは人間だけだ

この世界で

何も無くて泣ける人間なんて居ない
何もなくて誰かの為に自分を差し出す奴はいない
憎しみがなければ愛情は生まれない
無関心がなければ、誰も人を愛さない

欠けた存在がなくなれば
全てが揃った世界になれば

もう世界に、僕達は必要ないのだろう

揃っても

欠けても

全ては同じこと

どちらも未完成で不安定で

この世の中に完璧なんて必要ないのに
人は 僕達は 誰かは それを求める

理由もなく人助けなんてしない

訳もなく抱き寄せたりしない
もし冗談で演技ができるとしたら、それは傷付かないようにただ
自分を守っているだけなのだ

誰かの手を取って微笑むのは利用できるから

キスも抱擁も全てそう

同じ事

どうでもいい奴に限ってつけあがるから

哀しみを紛らわせることなんていくらでも出来る

人はそうしないと生きてはいけないから

どんなに自分が嫌いでも、殺したいほど憎んでいても
最期にはどんな手を使ってでも自分を守る

最愛の誰かが自分と天秤にかけられても、自分を選ぶ
そういう生き物だ

理由もなく人助けなんてしない

見返りがあるから、誰かに優しく出来る

見返りがあるから、形振り構わず手を伸ばすことが出来る

何も無いのに前に進めるなんて嘘だ

弱い者を見下す事で優越感に浸って

自己満足で他人にぶつかって

手に入らなくなるとまわりついて

迷惑も思惑も自制も利かない

誰も、人の欲を止める事なんて不可能だ

意思だけで、他人はどうにでもなる

僕達の意味とは無関係に世界は動く

明日、この身体が壊されることになったとしても

真っ白な紙があったとして、
幼い子供にそれを見せてみる
これはなんだ、と聞けば
おそらく白い紙だと答えるだろう

真っ白な紙の中心に小さな黒い点を描いたとしよう
それを同じように見せる

真っ白な紙だと認識していたものはその瞬間に姿を変える
これはなんだ、と聞けば
どんなに大きな紙だったとしても
おそらく黒い点だと答えるだろう

点の数によっては、答えも変わって来る

人の心もそれと同じだ
はじめから、何もかもが真っ黒だったわけではない
何も無いから白かったのだ

ただそれだけのことだ
考える力も、独りで生きていくための言葉も、世界の色ですら知
らずに

その両手には何も持たずに生まれてきたのだから

何も無いから
ただ真っ直ぐに生に縋り付いた

何故生まれたばかりの赤ん坊は呼吸をする？

何故お腹が空けば泣きわめく？

どうして声を上げて母を呼ぶ？

どうして眠くなれば機嫌が悪くなる？

それは何も無いからだ

何も、

何も、

真っ白な心には何も無かったから

ただ愛されたくて

その両手には何も持たずに生まれてきたのだ

ヨリが瞳を開けて、自分の教室だと認識するまで、セイジはなにも話さなかった

ただ机に伏せるようにして瞳を閉じているだけ、
昨晚のことも、報告のことも、ヨリがどうやって部屋のベットに横になったのかも

ターゲットがあの後どうなったのかも

全てに口を塞いで、ヨリを完全に遮断しているかのように
早朝の学校には、人もまばらで全くと言っていいほど誰もいない
今、教室に居るのはヨリとセイジだけだ

中学生、か

ヨリは溜息をそつと押し殺した
見た目は 普通、とまでは言えないけれど
セイジは漆黒の髪に紅の瞳
遠くから見たら、きつと学生に見える

僕も、そうなのかな・・・

何人も何人も

来る日も来る日も同じ仕事を繰り返して
翌朝は午前中のみ学校へ通って

栄養剤を飲み続けて
いつ壊れるか解らない身体を気にして
睡眠もろくにとらないで任務を続けて――

僕達は、もうどのくらいの年月を過ごしたんだろう？

考えるだけで吐き気がしそうな気がした
千年という時の流れは、一体何を変えたというのだろう
何が変わったのだろう

なにも変わってないよ、

ヨリは欠伸をして、机に頬杖をついた
頭の中には、セイジにどんな風に声をかけようか迷っていたのに
声は喉から出そうにない

ヨリは目の前で机に頭を伏せるようにして眠る、セイジの顔を見
ながら携帯電話のメールボックスをチェックした

着信は一件

本日開かれる三条主催のパーティについて事細かに綴られていた
昨日のターゲットに資料の情報を漏したと推測される者が何人か
そのパーティに紛れているらしい

今回は重役の護衛とその者達の始末だ
メールの内容からして、どうやらさつきパソコンの方で確認した
任務報告の方はそれほど重要な事ではないらしい

軽い溜息をついてから、携帯電話を音もなく閉じる

ヨリは今日の任務報告までどうやってセイジから昨晚の任務の話
をさせるのかを本気で考え始めた

招待状は配られた（後書き）

次回は多分また時間が戻って、セイジくんが三条に会いに行く所になります（笑）

なんかもうぐだぐだですいません、

no.

犀川が運転する車の中、俺とヨリは簡単に着替えを済ませると三条達が今夜パーティを行うであろうビルの地下へ向かった

俺はシヨルダーの中を確認しながら、昨晚のことを考えていた

願望屋に頼んだルートでの接近は、時間通りに間に合った

カナメとの合流も、全てが円滑だった

ただ、少しだけひっかかることがあった

「ただいま戻りました、三条さん」

ドアを開け、三条を見つけるなり俺の口は勝手に動いた

いつもの暗闇の中、片手にはワイングラスを持ち 馬鹿でかい一

面の窓に背を向けて俺の方に三条は顔をかたむけた

「ご苦労だったなセイジ、」

いつもの台詞、いつもの笑顔

作られた、偽物の笑顔で三条はうつすらと笑った

俺は沸き上がる何かを握りつぶして、三条に今回のターゲットから奪還した資料を差し出した

あえて何も言わない。下手に動くと、何かを悟られるのではない

か———それだけが、俺の口を凍らせた

三条は、それを無表情のまま受け取って、俺にもう一度微笑みかけた

後ろにいたカナメは、三条から資料を受け取ると、そのままペー

ジをばらばらと捲る

「……別にコレと言っていじられたような形跡はないですねえ」
京都なまりが混じったようなやわらかい声は、ただ誰に拾われる
でもなく部屋の中に落ちた

どうやらアンドロイドのカナメには、何か特殊な機能を備えている
ようだ

資料の調べが一通り終わると、カナメは資料をそのまま三条の手
元へと返す

「異常はありません、特に気にするような事はないですよ？」

それだけ言い終わると、くるりと踵を返したようにとびきりの笑
顔をみせた

三条に、というよりも『俺に』と言った方が正しいのかもしれない
俺はカナメと眼を合わせないように気を配って、そのまま何気な
く俯いた

そのことに気が付いたのか、カナメはすぐに口を開く
一つ一つの動作が嫌に綺麗で、俺は一瞬カナメがアンドロイドだ
ということ忘れそうになった

「僕はまだ仕事がありますから、これでよろしゅうお願いしますわ」
カナメはそれだけ言うつと部屋を出る

部屋の中には、三条と俺だけが残された

何も無い空間に、ただ薄気味悪いような沈黙だけが流れる

その時、三条の持っていたグラスの中のワインがグラリと揺れた

「ところでセイジ、」

「はい、何でしょうか」

試すような視線に、俺は顔を上げ三条を見た

真っ直ぐな視線はどこか遠くを見つめるような瞳をしている

俺の返事に満足そうな声でした

「今回の任務ご苦労だった。時間も守れていたしな」

「はい、ありがとうございます」

「それで、堤のことなんだが、……」

彼は今何処に居る？

何も語らない口の代わりに、三条の瞳が鋭く光った

俺は、ゆっくりと間を置いてから口を開く

「カナメが処理をするかと思っています。今回はヨリが後処理をする形だったので。最も、左程問題は無かったように思いますが」

今回の件でヨリからの報告は必要ないと考えますが、と付け加え俺は口を閉じた

もしかしたら堤という男は思った以上に価値のある男なのかもしれない、ということに初めて気が付いた瞬間だった

ただ、今はヨリが三条に接触するのかどうか心配だ

そればかりが前へとおし進んできて、深く追求して考えるのが難しい

それよりも、今回の資料が一体何だったのかを聞き出す方が先決だ

いつものタイミングで、三条から声がかかる

「そうか、なら今回は矢木那に話を聞く事はなさそうだな。ではもうさがっていいぞ、明日の任務ではナンバーズは全員集合するからな、くれぐれも遅れないように」

「はい、わかりました。では、失礼します」

そつと息を吐いて、シオルダーに手をかける

そのまま背を向けて、ドアの前に立った

俺は、部屋を出るフリをして、わざと思い付いたような声をだした

「三条さん、一つ聞いても宜しいですか？」

「何だ？」

「今回の報酬金額は？」

俺達のランクはすべて数字で現れる

それが一番分かりやすい

けれど、何よりも残酷だ

今回の『資料』が三条にどの程度重要視されているのかで、俺の報酬はかわってくるだろう

俺の問いに三条は、少し意外そうな顔をして俺を見た

「……珍しいな、セイジがそんなことを気にするなんて、」

「少し欲しいものがありました」

「そうか、」

俺の冗談に目の前の男は面白そうに薄く笑うと、軽い口調で笑い
その後に俺目掛けて手元にあった純金で出来た薄いカードを投げ
付けた

俺は、三条の動作に合わせて一步身を引く

空気を切るようにして投げられたカードが、俺が向かい合っていた
ドアに突き刺さった

「今回は矢木那と上手く分けなさい、」

三条の言葉に沿うようにカードを抜き取り一礼した

「——ありがとうございます」

ドアを開き、そのまま一度も振り返らずに廊下へと出る

金色をしたカードには幾らかの数字と三条聡太郎の文字が刻まれている

溜息を押し殺して、俺は鉛色の箱を使う為にボタンを押した

乾いた音が、耳の中に響いた

少しでも憂鬱な気分になったのは、三条に会った所為だ
それだけを何度も自分に言い聞かせた

——ただの金額で人の価値を決めるな、
本当は、それを揉み消すために言い聞かせていた

箱のドアが音もなく開いた

途端に汚いアナウンスの声がして、乗り込むとドアが閉じた

『お疲れ様ですセイジ様 明日の任務でのご報告をさせて頂いても
宜しいですか？』

「ああ、」

『ではお伝え致します——』

壁によりかかって瞳を閉じると、世界のこととはどうでもいいとさえ
思えた

ただ、本当に欲しいものさえ手に入れば、
他の事はどうでもいいと
そう思えたんだ

偽物の正体は本当

王様の指揮したパーティーは
囁かなホームパーティー、とはいかないようだ

そんなことを、ヨリの隣に突っ立っていたセイジは考えていた
何処を見渡しても、華やかな食事と、色とりどりのドレスを着込
んだ人間達が蔓延している

天井に大きく煌めくシャンデリアは、きっとこのホール内の何処
にいてもその存在がはつきりとわかるくらいに輝いていた

本日の任務はナンバーズ全員参加

例外はもちろん、他の任務に行くことを許可されない

前回のターゲットでは、この件は片付けられないのだろう
力の入れ具合が、何となくいつもとは別格な気がしてならない
そんなにあの資料が大切な？

嫌味のように、喉元から何度のその言葉が出そうになる所で、ヨ
リにジャケットの裾を掴まれた

「ねえ、セイジ」

「…………、なんだよ」

「ご飯食べないの？せつかくいつぱいごちそうあるのに」

気の抜けたような声に少し焦るような瞳の色が混じっていた
溜息をつきたい衝動が一気に押し寄せて来るが、この場に相応し
くないことは明白なので、押し戻しておくことにした

どうせ食べても意味のないことくらいわかってはいるのだ
けれど、どうやら食事のことだけでヨリが声をかけたわけじゃな
いらしい

「そのカッコ、そんなに落ち着かない？」

「——っ！」

俺の声に、ヨリは瞬時に顔を赤らめて俯いた
どうやら図星のようだ

裾を掴む力が、さっきとは比べ物にならないほど強い
少し動くと破れそうだ

「そ、そんなことない」

「顔が赤い」

「……気のせい、」

「動悸がおかしい」

「……気のせいっ」

「じゃあそんな泣きそうな顔するなよ、」

「う、うつるさいなあ！あのね、好きでこんなことしないんだから
ね！？」

知ってんよ、んなこと。

ヨリが着ているのは白いフワフワのドレスワンピース

赤茶色のウィッグと、カラーコンタクトを付けている所為で、殆
ど顔は誰かわからない

まあ、『本当』^{おんな}でいるのが少ない所為で着慣れてないのもあるか

「僕普段はオトコノコってことになってるんだから、ナンバーズに
こんなこと知れたら大変だよ………！」

最小限の小声でヨリが溜息をつく

普段、通常何も無い限り、ヨリは偽物^{おとし}として生活している

大して生活には問題ない

ただ、このヨリの秘密がバレルとナンバーズほかのやつらが階級を上げに俺達を狙って来る

そうなった時に、女であることが知れたらまっ先にヨりを潰しにくるだろう

ヨリは他の奴等に比べて、身体能力が疎い
それでも普通の人間に比べたらサイバーチルドレンの身体能力は、超人と同じだ

ただ、俺達のなかでその能力が低いのだ
ヨリは人の心こころの中に入ることに長けている所為か、その他のことはまるで使えないと三条に判断された

簡単に言うとお荷物、に認定されたことに代わりない
10人の中で一番頭も良く、能力的にも申し分無いけれど、任務に対して一番リスクを負うのはヨリだ
そして、俺の中で一番重いのも――

だから三条は俺と組ませた

「ヨリ、いつまでもいじけるなよ。もうじきここに全員集まる」

「わかってるよ、」

「ならいい」

「でも今回の任務は地道に探さないといけないみたいだね、ターゲットは全部で八人」

「猟れなかった場合は降格か？」

「うん、数的には何人猟つてもいいみたい」

「じゃあ行くか」

大切な物があるなら、自分から動かないと守れない

「——楽しい狩りのハジマリだ」

シオルダーにかけた手は、いつもより脈を打っていた
何人も殺してきた

数えきれなくなるほどのイノチを手にかけてきた
泣叫ぶ奴も、助けてくれと懇願する奴も
握りしめた黒い鉄の塊が、激しく揺れる

いつもいつも俺を縛り付けるのは、大事な何かを奪う
白い正義と言う名をもった悪魔の影

人としての最低ライン
勝ち取った命の数だけ、この世で息をしていられるのなら
生きているのか確かめる
終わった後の未来なんてたかが知れてる
だから、前へ進み続けないと、大事な何かは消えてしまう
だから

見据えたのは、血殺しの道

この道を歩むと決めた
いつかこの先で、悪魔の影を潰すと夢見て

偽物の正体は本当（後書き）

亀な更新で申し訳ありません、

まあ、あの

まだたくさんどんでんがえしとかあるとおもつので↑

ちよつとくらい期待して、次回を待っててくれるとありがたいです

（、、）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9020c/>

血を紡ぐ者——反逆の声を風に乗せて——

2010年12月11日02時41分発行